
起きたら異世界でした。

一ノ瀬 崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

起きたら異世界でした。

【Nコード】

N5486X

【作者名】

一ノ瀬 崇

【あらすじ】

特技は現実逃避、趣味は日向ぼっこ、好きなタイプは小さな女の子。そんな僕、片桐悠莉が異世界で繰り広げる剣と魔法と幼女のファンタジー。や、知らない内にトリップしてたけどね。

知らない間に異世界トリップ。

まず感じたのは、全身の気だるさ。続いて何かが僕へと向けている視線に気付く。

微睡む意識を強引に浮上させ、薄く開いた僕の目に飛び込んできたのは――

「……………あ、やっと起きた」

見知らぬ、幼女だった。

肩口まで伸びた紫銀の髪と、青紫の瞳が印象的な幼女。

顔立ちも整っていて、数年も経てば誰もが振り返る美少女になるだろう。

麻布で編まれたゆったりとしたチュニックとやや煤けた茶色のズボンを着ていて、何処となく漂う異国情緒が幼女のかawaiiさを引き立てている。

そんな美幼女が、僕の顔を覗き込んでいた。この娘は誰だろう？というか僕の部屋にどうやって入ったんだ？

そんな疑念が頭の中を駆け回り、質問として外へ出ようとするが、

「……………！」

声が、出ない。

今気付いたが口も喉もカラカラだった。

ぱくぱくと口を動かす僕を見て、幼女は首を傾げる。

――かわいい。じゃなくて、水、水をください。

僕の思いが伝わったのか、幼女はにこりと微笑む。

幼女は僕の寝ているベッドから離れて、部屋の左の方へ歩いていく。自然とその姿を目で追っていたが、上体を起こそうとした所で、

「……っ、あっ！」

背中が焼けるように痛み、ぐもった声を上げてしまう。

僕の声に驚いたのか、幼女が振り向く気配がする。

「あっ、まだ動いちゃダメだよ！」

幼子特有の甘く高い声に押し留められる。

僕は体を起こすのを諦め、ベッドに深く沈み込むように力を抜く。

右の肩甲骨から腰にかけてじくじくとした痛みが広がっている。

幼女は僕が無理に起き上がろうとしない事を確認すると、ドアを開け部屋を出て行った。

幸い首は動かせるようなので、目で幼女を見送る。

徐々に遠ざかる足音をBGMに、僕は深く息を吐き出した。

——何だろう、この背中の痛みは。怪我をした覚えは無いんだけど

……。それよりあの娘は一体？

そこまで考えた所で、僕は気付いた。

——って、この部屋、僕の部屋じゃない？

混乱する僕の元へ、足音が近付いてくる。

行きと違い、足音は2つ。ドアがゆっくりと開かれ、先程の少女が水差しとコップを抱えてやってきた。

その後ろから、もう1人が姿を見せる。

少女と同じ紫銀の髪と青紫の瞳。恐らくは少女の姉だろう。少女よりもやや長い髪を頭の左で結んでいる。

——ああ、何て言うんだっけか。サイドポニー？

整った顔立ちは正しく美少女と言って差し支えない。

薄い青のローブに身を包んでおり、ゲームに出てくる修道女みたいな格好をしている。

何より目を引くのは彼女が手にした古びた杖。

一体何に使うんだろうか？

と、少女がコップを差し出していたのに気付く。

ありがとう、と心の中で感謝しつつ受け取ろうと手を伸ばそうとして、

——あ、あれ？

幾ら力を入れても腕が持ち上がらない。と、僕の体が動かない事を察したのか、少女はコップを引っ込める。

そして少女は水を自分の口に含むと、

「んう」

「んむっ!？むっ、んくっ、んくっ」

口移しで飲まされた。部屋の入り口の方で少女が何やら衝撃を受けているみたいだが、僕はそれどころじゃない。

口や喉を潤していく水に混じって、甘い香りが鼻へ抜ける。

反射的に舌を伸ばし更に水分を求めると、舌先に温かく柔らかな感触が生まれる。

舌で押せば絡まるようにうねり、逆に引けばおずおずと求めてくる。夢中でそれを吸っていると、幼女がゆっくりと唇を離す。

互いの舌を繋ぐ銀色の糸を見て、自分が今何をしていたのか気付いた。

——ちよ、ちよっ!？僕今この娘とデープなチツスを……!？

顔を真っ赤にする僕を、頬をほんのり桜色に染めながら幼女が見つめ返す。

幼女は目を少し潤ませながら上目使いで、

「おかわり、いる……?」

「な……何してるのよミナあ!？」

思わず頷き掛けた瞬間、少女が叫ぶように声を上げた。

「だってお兄ちゃん、体動かないみたいだったから」

「それにしたって、く、口移しは無いでしょう!？」

「でも喜んでたよ?」

待ちなさいお嬢さん。その発言はいろいろと危険です。

尚も口論を続ける2人を何とか宥めるべく、僕は口を開いた。

「えっと……取り敢えず2人共、落ち着いて」

「これが落ち着いていられますかっ!」

少女にあっさり一蹴された。
しかしここでめげる訳にはいかない。
心を強く持って再度声をかける。

「ほら、彼女も悪気が有った訳じゃないし、むしろ親切心というか献身的なアレで」

「だとしても方法に問題が有りすぎますっ！」

むう、なかなか手強い。

ここは幼女のした事を好意的に受け止めている、という所をアピールしてみよう。

「ぼ、僕はそんな、嫌じゃなかったから大丈夫」

「それはそれで問題です！」

ぐっ、確かにそうだ。言葉の選択を誤ったかな。

……な、なんだよう、ロリコンじゃないぞ！……多分。

その後も何とか説得を続け、漸く少女が落ち着いたのが10分後。
ベッドから起き上がれない僕の横で、丸椅子を持ってきて座り足をぶらぶらさせている幼女。その正面の椅子に少女が座る。

「……失礼しました。私はこの教会の修道女でシーナと申します」

そう言って少女――シーナは頭を下げる。

やっぱりシスターだったのか。というかこの建物は教会だったのか。シーナの落ち着いた声は何処か透き通っていて、賛美歌を歌ったらかきっと天使の歌声なんて言われるくらいに聴いていて心地良い。

「私はミナだよ。修道女見習いなんだ」

幼女は僕の右手に指を絡めてにっこりと微笑む。

……ヤヴァイくらいにかわいい。というか、僕の人差し指を優しくきゅっと握るのは反則だと思います。

ちよっとドキッとした胸を落ち着かせつつ、僕は口を開いた。

「僕は悠莉。片桐悠莉。カタギリが姓で、ユーリが名前だよ」

僕の名前を聞いて、シーナが驚いた風に口元へ手をやる。

——何か変な事言ったかな？

2人の名前が外国人風だったから、一応姓と名を言ってみただけど。

もしかしたらシーナは椎奈でミナは美奈という日本人でした的なオチだったり？

うっわ、僕超赤っ恥じゃん。

みたいな事を考えていると、恐る恐るといった様子でシーナが切り出した。

「あの……カタギリ様は、貴族なのでしょうか？」

「へ？」

言われた意味は解っても、言われた経緯が解らない。
僕の何処を見て貴族だなんて思ったんだろう。

「僕は貴族じゃないよ、ただの平民。だから普通にユーリ、って呼んでくれればいいよ。……でも何で僕を貴族だと思ったの？」

貴族じゃない、という言葉を受けてシーナはほっと息を吐く。

「この国では、姓を持つ方は皆貴族ですので……。」
「そっかぁ。……ん、この国？」

あれ、何か今変な事を聴いた気がする。

この国、ってシーナ言ったよね。

何処かで、こんな感じの状況下で、こんな感じの台詞を聞いた事が有ったような……あ、ああ、思い出した。

確か異世界に召還された主人公が魔王を倒すRPGの出だしにこんなやり取りが有った筈だ。

はっはっは、成程なるほど。

つまりここは異世界で僕はトリップした訳か。

「うわぁ……マジかぁ……」

いきなりテンションがた落ちの僕を見て慌てるシーナ。

「あつ、あのっ、私何か失礼な事を!？」

「いや、うん、大丈夫。ちよつと現実逃避してるだけだから」

気に掛ける余裕も無いのでシーナを適当にあしらいつつ、深い溜息を吐く。

——状況を鑑みるに、80%の確率で僕は異世界トリップしたとみている。

まだ決定的な証拠を目にしていない事や、自分の感情を含めて20%くらいはまだここを地球——更に言えば日本だと考えている。

だって異世界トリップものの定めとして、元の世界に帰れないのは定石。運良く帰れる手段が有るとしても、どうせすぐには帰れない。そんなショッキングな出来事をすんなり受け入れるには、少々心のHPが足りない。

まだ救いが有るのは、そこまで元の世界——地球に未練が無い事、かな。

僕に家族が居ない。正確には、家族を失ったばかり。

今年の正月に両親と妹を事故で亡くし、祖父に引き取られて、やっとな両親と妹の死に自分の中で区切りを付けたのが2ヶ月前。

小さい頃から祖父とは付き合いが有ったけど、僕の方に照れや遠慮が有って今一つ打ち解けられていなかった。

だから祖父の事はそこまで心残りじゃない。

……いや、感謝はしてるよ?でも、ちよつと薄情かもしれないけれど、そんな簡単に割り切れるものでもないし。って僕は誰に言い訳してるんだ?

程良い感じにパニックっていると、ふわりと柔らかな感触が僕を包んだ。

視線を上げると、ミナが僕の頭を抱えるように抱き締めていた。

「……ミナ？」

「だいじょぶだいじょぶ。私がいるからさみしくないよ？」

ね？と笑い掛けるミナ。

小さな手で頭を撫でられる度、少しずつ自分が冷静になっていくのが解った。

「私が泣きそうな時はお姉ちゃんがこうしてくれるの。ユーリ、今悲しい顔してるから、私が撫でてあげるね」

ミナに言われて初めて気付いた。

——僕はミナが心配する程、悲しい顔してたのか。

いけないいけない、こんなに小さな娘に心配掛けてるような奴は男じゃない。

祖父に教わった教訓を思い出して、ネガティブな思考を追いつく。

頭が冷えると、幼女特有の甘い香りが鼻腔をくすぐる。そして僕の顔に当たるこのふにふにとした触感の間違いなくちっぱい。

——あれ、ひょっとしてここ異世界じゃなくて天国じゃ？

ポジティブ気分で現実を見据えると、目の前には幼女の胸。横目でちらりとシーナの位置を確認。

よし、この角度なら見えない筈。

僕は意を決して息を吐き出し、

「クンカクンカスーハースーハー……」

うん、堪能した。

大丈夫、再度確認したけどシーナは全く気付いてない。
え、ロリコン？それがどうした！

先程とはまた違ったベクトルで思考を暴走させる僕。
と、何やら視線を感じる。

目を上げると、ミナが軽く頬を染めて僕を見ていた。
そして僕の耳に口を近付けると、囁くように言った。

「……ユーリの、えっち」

はい、すいません。もう色んな意味でクリティカルです。
思わずミナを押し倒そうとして、

「っあ!？」

背中に激痛が走る。

ミナの色香にすっかり惑わされていたが、僕は怪我人だったのだ。
怪我をした経緯は知らないけどさ。

僕の悲鳴に2人が慌てる。

「ユーリ、だいじょぶ!？」

「ミナ、どいて! ユーリさん、今治療しますから!」

幸いにも強烈な痛みは一瞬で引いている。だからこそ、シーナが何をしようとしたのかを見れた。

シーナは古びた杖の先を僕へ向けると、流れる水のような声で何かを唱え始めた。

「生命の息吹よ、彼の者の傷を癒せ、ライブ！」

シーナの声に合わせて小さな光の粒子が杖の先に集まり、拳大の大きさまで膨れ上がる。すると光は弾け飛び、雪のように僕の体へ降り注いだ。

暖かい光が僕の体の中に染み込むように融けていく。

その光景に呆然としていたら、急に背中に違和感が走った。

もぞもぞとした妙な感覚。例えるなら背中の皮膚が意志を持って這い回っているような。

その気色悪さに思わず身を振る。

しまった、と思った時にはもう遅く激痛が背中を走……アレ？

「痛く……ない？」

背中のもずもずもすぐに収まり、全身が気だるい以外に体の異常は感じられない。

試しに体を起こしてみる。力が入りにくい以外は特に異常も無かった。

そんな僕の様子を見てシーナは満足そうに笑みを浮かべる。

「良かった、成功ですね」

「成功って……今何したの？」

僕の疑問に、笑顔で答える。

「ライブの魔法を掛けたんです。失った血は戻らないのでだるさは残りますが、傷は塞がったハズですよ」

異世界トリップもののお約束が出た。

——魔法かぁ。魔法って、魔法だよなぁ。

意味の解らない事を考えながら、僕は諦めて状況を整理する事にした。

どうやらここは本当に異世界みたいだ。

あの魔法も、光だけなら手品みたいにトリックがあるのかもしれない。でもさっきまで有った背中 of 激痛が、あの光を受けてから全く無くなった事の説明が付かない。

だからアレは魔法だと信じよう。

まず大前提として——地球には魔法は無い。

そしてこの世界には魔法が有る。

結論↓ここは地球じゃないよ。

「……うん、完璧な理論だ」
「どしたの、ユーリ？」

首を傾げて僕を見るミナ。

うん、その表情は止めようね？ かわいすぎて僕が壊れるから。
自己主張を始めようとするマイサンを気力で押し留めながら、どうしたもんかと天井を見上げる。

取り敢えず住む所を探さないといけない。

どこか宿屋みたいなのがあれば良いんだけど。そうなるとお金も必要だなあ。この世界にギルドみたいな施設は有るかな？

ぼんやりと考えていると、部屋の外から大きな音が響く。

『ゴーン……ゴーン……！』

「うわっ、な、何？」

「来客を知らせる鐘ですよ。私は少し席を外しますから、何か有ればミナに言い付けて下さいね」

鐘の音に驚いている間にシーナは部屋を出て行った。

これからの事とか魔法の事とかいろいろ話したかったんだけどなあ、とぼーっとしていたら、ほっぺをぶにとつつかれた。

そのままほっぺを摘まれたり、おでこをぺちぺち叩かれたり。

「えっと、ミナは何をしてるのかな？」
「んー、なんでもないよ」

尚もぺたぺた触ってくるミナ。
どこことなくご機嫌な様子で纏わり付いてくる姿は子猫っぽくてかわいい。
やられっぱなしだと負けた気がするから、両腕に無理やり力を込めてむぎゅっと抱き寄せる。勿論ミナが痛くならないように上手く加減して。

「ふわっ!？え、えと、ユーリ？」

そのまま腕力で小さな体を持ち上げ、僕の上に寝かせる。
ミナは戸惑っているけど暴れたりはしないで大人しくしてる。と、

「……ふわぁ」

寝転がった所で急に睡魔が襲ってきた。

ミナを抱き上げた事で予想以上に体力を消耗したらしい。

目を閉じると意識がすぐに薄くなり、僕は夢の中へと入っていった。

こうして、いろいろ現実逃避したまま僕の異世界トリップ初日は終了した。

恩人はエルフでした。

僕がこの世界に来てから3日。

その間にシーナとミナからこの世界の知識や常識、それから僕が現れた時の事を教えてもらった。

まずは今僕が居るこの場所について。

ここは《西の大陸》って大陸の南西部に在る《リンディア王国》って国の更に南西部、森林地帯の入り口に在る《タマタ村》っていう小さな村。

村人達は主に農業や放牧、狩りなんかで生計を立てている。

村にある一番大きな建物がこの教会で、診療所や集会所みたいな役割も持っているらしい。

つい最近神父さんが亡くなって、代わりにシーナが村人達に支えられながら教会の仕事をこなしているみたい。

それと週に一度、行商人の一行がやってきて、村で穫れた野菜や動物の皮と、街で売っている日用品や食材なんかを売り買いしてる。

行商人の馬車やシーナの話聞く限り、この世界の文化レベルはまだ低い。

産業革命以前のまま停滞しているみたいだ。

その理由は魔法が有る所為だと思う。

多分だけど、魔法の技術を発展させようとすると、科学の技術は成長していかないのだろう。

——魔法かあ。やっぱりまだ現実感が無いなあ。

聞いて驚いたのは、この世界の人は大なり小なり皆魔力を持っているという事。

その魔力が多い人は、魔導師になる為に国が運営する学校へ行く。優秀な人材を集める為に入学金や生活費は国持ちらしい。シーナも学校に入っていたのか聞くと「私みたいに魔力が少ない人は入れませんよ」と笑って言われた。

僕の傷を治したくらいだから、きっと大魔導師なんじゃないかって思った、と伝えたらちよつと照れてた。

詳しく聞くと、シーナの杖に秘密があった。

あの杖は神父さんが使っていたもので、大怪我でも治療出来る《ライブ》の魔法が込められたものだったんだ。

魔法を使うにはそれぞれの魔法が込められた杖や魔導書が必要で、治癒系の魔法が込められた杖は比較的高価な物らしい。

そんな貴重な物を僕に使って良かったのか、って聞いたらシーナは困ったように笑いながら答えた。

「ミナの命の恩人を放っては置けませんよ」

そこから、話は僕が現れた時の事に飛んだ。

事の始まりは3日前の朝。

ミナが1人で薬草を取りに近くの森へ入っていった。

この時期には珍しく大ぶりの薬草がいっぱい生えてて、取るのに夢中になる余り普段は立ち入らない森の奥へ進んでしまった。

昼近くになり、さあ帰ろうかと歩き出した所で《荒熊》に遭遇してしまった。

荒熊は文字通り熊なのだが、気性が荒く鋭い爪で獲物を切り刻んでから食べるという、残忍極まりない習性があるらしい。

恐怖で動けなくなったミナに荒熊が近付き、腕を振りかぶる。

ぎゅっと目を瞑るが、痛みの代わりにやってきたのは優しく包み込むような感触。

目を開けると、僕がミナを抱きかかえるようにして、荒熊の攻撃を防いでいたらしい。

荒熊は駆け付けた狩人に退治され、意識の無い僕はそのまま教会へ運び込まれた、という訳。自分でも知らない間に、僕は村のちょっとした英雄になってた。

ミナは命を助けてくれた――結果的にそうだった――僕に好意を持ったようで、甲斐甲斐しく身の回りの世話を焼いてくれた。

まあ、荒熊に襲われた時の恐怖が、そのまま僕へのドキドキにすり替わったんだろうなあ、って思う。

吊り橋効果だっけ？

そんな訳でミナに介護されて、やっとベッドから出ても大丈夫とシーナに言われたのが今朝。

なんだかんだですっかり鈍ってしまった体に喝を入れようと、教会の庭で軽くストレッチを始めた所で現在に至る。

朝の日差しが目には滲みるなあ、とぼやきながら両腕を上には伸ばす。ボキボキと療養生活で凝り固まった肩や背骨が音を立てた。

その音に混じって、背後から草を踏む音が聞こえる。

「いやはや、凄い音だね。おはよう、ユーリ君。もう起き上がっても平気なのかい？」

掛けられた声は、女性にしては低めだけど、つい耳を傾けたくなる

ような綺麗な声。

僕は振り返って声の主に笑顔を向けた。

「おはようございます、エアリィさん。もう怪我は完治したんですけど、流石に体が鈍っちゃいまして」

目の前に立つ女性はエアリィさん。

荒熊を退治し、僕を教会まで運んでくれた恩人の狩人さんだ。

身長は僕と同じ160cmくらいで、すごい美人なおトナの女性。切れ長の緑色の目と薄い金の長髪がとてもチャーミングだ。

何より目を引くのは、ピコピコと揺れる長い耳。

そう、エアリィさんはエルフなんだ！

いやあ、まさか本物のエルフを見られるとは思ってなかったから、最初にエアリィさんを見た時は衝撃だったね。思わず「その耳触っても良いですか!？」って聞いちゃったし。

あの時は顔を赤くしたエアリィさんに断られちゃったけどね。

「元氣なのは良いけど、余り無理はしないようにね。あれだけの怪我をした後というのは、存外動けないものだから」

「あはは、解ってますよ。今日は精々散歩くらいにしておくつもりでしたから」

「それじゃあ散歩が終わったら、私の家に寄ってくれ。何も無いがお茶くらいならだすよ」

そう言って微笑むエアリィさん。

その姿は近所の優しくて美人なお姉さんって感じた。

今日も森へ入るのだろう、ゲームとかで狩人やアーチャーが着てそうな――グリーンサーコート？を纏い、背中には木で出来た弓と矢筒を背負っている。

ただ、僕の視線が向かうのはコートの盛り上がった部分。

エアリィさんはスレンダーな体型をしてて全体的には華奢なんだけど、胸元はしっかり女性らしさをアピールしてる。

――あれは間違い無くCはある！

と、僕の視線を感じ取ったのかエアリィさんは胸を隠すように腕を抱き、身を振りながら頬を赤く染めた。

「私も元気なのは良いと言ったが……あんまり見られると恥ずかしいものだよ？」

僕の理性はダメージを受けた！

いや、エアリィさん、それ反則です。かわいすぎです。

雰囲気はオトナの女性なのに、こういったちよつとした仕草が、どこことなく子供っぽくてかわいい。

屈託無く笑った時なんか、僕と同じ年――14、5歳の女の子にしか見えない。

前にお見舞いに来てくれた時のワンピース姿は永久保存版だった。

あ、思い出したら鼻血出そう。

反射的に鼻へ手を伸ばす。勿論鼻血は出ていない。

「……ふふっ、まあそれだけ元気なら心配はいらないか」

僕の動きが面白かったのか、エアリィさんが笑みを零す。

思わずぼーっと見ていると、

「ん、どうしたんだい？」

「笑ったエアリイさんが素敵だったので見惚れてました」

……ハッ！？僕は今何を口走ったんだ！？

上がりっぱなしのテンションに任せてとんでもない事を言ったような気がする。

見ればエアリイさんは顔を真っ赤にして俯き、ぷるぷると肩を震わせていた。

——うっわあ、エアリイさんマジ切れ状態？一体何を喋ったんだ僕！？

軽くパニックになっている僕をキッと見据えて、エアリイさんは腰に手を当て怒るように言った。

「そっ、そういう事は余り軽々しく言わないでくれないか？」

「は、はいっ！もう言いません！」

「いや、たまにというか、言うならもっと雰囲気の有る所で……」

最後の方は声が小さくなって聞こえなかったけど、取り敢えずエアリイさんが怒ってるのだけは解った。

もうテンションに任せて喋るのは止めよう、うん。

「それじゃあ、私はそろそろ行くよ」

「はい、あ、エアリイさん」

うん？と軽く首を傾げて僕を見る。やっぱりかわいいなあ。

恩人の無事と狩りの成功を願って、僕は自分に出来る100%の笑顔で言った。

「行ってらっしゃい」

「――ああ、行ってきます」

僕の言葉にきよんとしたエアリイさんだけど、花が咲いたような素敵な笑顔を返してくれた。

エアリイさんを見送ってから、僕は一通りの軽い運動を始めた。

目測50mダッシュや腕立て伏せ、スクワットなんかは少しキツかった。

筋トレって1日サボっただけでキツくなるけど、3日も寝転がっていたらここまでキツくなるのか。

額に汗を掻きながら、大きく深呼吸する。

吹き抜ける風が気持ちいい。

一息吐いて、僕は庭に生えている大きな木の根元に腰を下ろした。右手を伸ばし、隣に置いてある麻袋を掴む。

「はてさて、一体何が入っているやら」

実はこの袋、僕が肩に引っ掛けていた物らしい。

少なくとも僕はこの袋を見たのは今朝が初めてだ。そう言えば、とシーナが僕の替えの服を調達してきてくれた際に、思い出して持ってきた物だ。

見た目の割には随分と軽く感じるので、あんまり中身は入っていないんじゃないかと思う。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

ちよっぴりドキドキしながら麻袋に手を突っ込んだ瞬間、

「ユーリっ♪」

「わひゃあっ!？」

突然掛けられた声と背中にぶつかる感覚に、妙ちくりんな悲鳴を上げてしまう。

そのまま僕の肩に手を回してきゅっと抱き付いてくる。むむっ、この甘い香りは――

「ミナ、脅かさないでよ」

「にへへ、ゴメンね」

ていつ、とミナの体を持ち上げて僕の膝の上に乗せる。

背面座……げふんげふん。

頭をくしくしと撫でると、ミナは嬉しそうに目を細める。と、僕の左手が入っている麻袋に目が行ったようだ。

「気になる？」

「うん、ユーリが何を持ってきたか点検しようよ」

「じゃあ一緒に見てみようか」

左手を突っ込んだまま袋ごと持ち上げ、ミナの前に置く。

袋の口を開け、中の物を取り出す。

「これは……折り畳み傘？」

取り敢えず足元に置いて他の物を取り出す。

次に出て来たのはなんとみかんの缶詰め。

更に手を突っ込むと栓抜きが付いた缶切りが見つかった。

その後も出るわ出るわ、折り畳み傘3つ、缶切り1つ、みかんの缶詰め5個、白桃の缶詰め3個、釣り糸50mが4つ、ガムテープ2つ、お土産の木刀1振り、2L入る水筒が2つ、招き猫の貯金箱が1つ、手動発電式の懐中電灯が2つ、露天商で売ってそうなアクセサリーが幾つか、他にも大量に出て来た。

最初はミナも物珍しい品に多様な反応を見せていたけど、流石にこの量を前に黙り込んでしまった。

僕も疲れやら呆れやらで、この四次元ポケットみたいな麻袋に手を突っ込むのを止めた。

多分、まだ何か入ってる。だって袋を振ったら中でガサゴソいってるもん。

「ふわぁ……すごいね、これ」

「取り敢えず手分けして倉庫に持って行こっか」

目的の倉庫は教会の隣に建っている。

ちよつと寂れた木造2階建てで、1階は壊れた家具なんかを置いてある所謂粗大ゴミ置き場。2階が余り使わない雑貨なんかを保管する場所。

たまに掃除しているのか、埃が積もっていない階段を2人で登っていく。

大半のガラクタを整理して倉庫に納め、やっと片付いたのは昼近くだった。

ふう、と一息吐いているとミナが一点を見続けているのに気付いた。その視線を辿ってみると、無造作に置かれたアクセサリーの山があった。

——やっぱり女の子だなあ。

なんとなく微笑ましく思い、僕は右手を麻袋に突っ込んだ。

目的の物を思い浮かべて右手を引き抜くと、想像してたのよりちよっぴりオシャレな物が指の間に挟まれていた。

手のひらに隠しながら、僕はミナに声を掛ける。

「ねえミナ、ちよつとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

要領を得ない僕の言葉に首を傾げながらも、ミナは要求通りに動いてくれた。

ちっちゃなミナの手を両手で優しく包み込み、そつと、それを挿し込む。

「ん。ミナ、もう目を開けていいよ」

少しの不安と沢山の期待が混じった表情で目を開くミナ。
そして左手の中指に光るそれを見て、顔を輝かせた。

「わぁ……!!」

ミナの左手に光るのは銀の指輪。

蔦が絡まり合う装飾が施されていて、控え目ながらも気品のあるデザインだ。

ちなみに何故かサイズはぴったりだった。

「ありがとう、ユーリ♪でも、こんなに立派なの私がもらっているの？」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないかね」

そう言ってミナは、屈んだままの僕に照れたような笑顔を見せた。
お返しなんていいのに、って言おうとした僕の口が塞がれる。
頭の後ろと背中に腕を回して僕が逃げられないようホールドしながら、ミナは小鳥が餌を啄むように僕に唇を押し付けた。

「んっ、んちゅ、ちゅっ、はむう、ちゅ、ユーリ、んっ、しゅきい、ちゅっ」

動けない僕を貪るように情熱的なキスをするミナ。

小さな舌が僕の口内を弄り、唾液を舐めとっていく。

んくんく、と白い喉を鳴らして僕の唾液を飲み込む姿に理性が焼き切れそうになる。

僕の唾液を飲み干したミナが一息吐くと、今度はミナの唾液が僕に流れ込んできた。

鼻へ抜ける甘い香りに脳を揺さぶられた。

体が熱い。

今僕にキスをしている、この少女が欲しい。

そんな衝動に突き動かされ、僕は抱きかかえるように腕を回す。

急に動かれ驚いたのか、ミナの体が硬直する。

僕はミナが動かないのいい事に、舌で彼女の口内を蹂躪する。

夢中で舌を伸ばし唾液を舐めとっていると、舌先がミナの舌に触れる。

「んむっ、ふむうっ!? んっ、んくっ、んふううっ♪」

ミナの舌に触れる度、奥からじゅぷつと蜜が溢れる。

溜まった唾液ごと柔らかく小さな舌を吸ってみる。

幼い体がびくんびくんと軽く跳ね、ミナは力無く僕に凭れ掛かった。息が苦しくなって口を離す。

僕とミナを繋ぐ銀色の糸が服に落ち、妖しく輝いていた。

「んああ……っ♪ユーリい、しゅきい……♪」

僕の腕の中でとろけた笑みを浮かべるミナ。

ミナの胸の小さな突起が、服を押し上げていた。
それを摘もうと僕は手を伸ばし――

『ガラーン……！ガラーン……！』

突如鳴り響いた鐘の音に、僕もミナもびくうっ！と身を震わせる。

一瞬、誰か来たのかと思っただけどすぐに思い当たる。

あれは正午の鐘の音だ。

来客用の鐘は建物の中には良く響くけど、教会の隣に併設されているこの倉庫までは音が届かない。

それに若干音色も違う。

「……あは」

びっくりした反動か、どちらともなく笑い声が漏れた。

もうさっきのピンク色な雰囲気は無い。

ちよっと惜しかったかな？と思いつながら、僕はミナに右手を差し出した。

「それじゃあ、お昼ご飯を食べに戻ろうか」

「うん、戻ろう♪」

純真な笑顔で僕を見上げたミナ。

手を繋いで倉庫を後にする。

と、教会の入り口まで来た所でミナは手を離した。

数歩先に行くところと振り返り、僕にだけ聞こえる声で言った。

「……また、しょうね♪」

頬を赤く染めて教会の中へ駆けて行く。

残された僕は顔を真っ赤にしながら、ゆっくりとその後を追った。

だから待つんだ息子よ。君の出番はまだまだ先なんだから。

いや、まあ、ミナとキスしてた時は、僕のズボンに五重塔が建ってたけどさ。

閑話——私の好きな人。

突然だけど、私は今好きな人がいるの。

その人はやさしくてカッコ良くて……ちよっぴりえっち。

顔はかわいくて、髪の毛を伸ばしたら女の子に見えそうなの。

その人の周りの空気もやわっこくて、えっと……にゅ、にゅーわ？
日向ぼっこしてる時みたいにぼかぼかしてるよ！

その人の事を思い出すだけで、ちよっと幸せな気分になっちゃう。
……あ、いけないいけない。

ぼーっとして部屋を通り過ぎるところだった。

そっと扉を開けて、中をのぞき込む。

うん、まだ寝てるみたい。

最近の私の楽しみは、毎朝その人を起こす事。

「ユーリい、朝だよ」

体をゆすってみるけど、すやすやとかわいい寝息を立てたままのユーリ。

パツと起きるのは苦手みたい。

だから私は毎朝、ユーリにちよっぴりいたずらするの♪

「ていっ」

いきおいを付けて指をユーリのほっぺに伸ばす。
むにゅとやわっこい感触。

もちもちのほっぺを触つてると何だか癒される。

そのまま指を下にずらすと、ユーリのくちびるに当たる。

朝だからかな？ちよっと乾燥しててカサカサ気味。

私は振り返って部屋の入り口を見る。

……うん、お姉ちゃんに見られてない。

最初にユーリを起こした時はお姉ちゃんに見付かって、後で怒られちゃったからね。

同じ失敗はしないのっ！

私はドキドキする胸を押さえながら、ユーリのくちびるに顔をよせた。

舌を伸ばして、よだれをくちびるに薄くぬるように舐める。

チロチロ、ペロペロ、時々ちゅっちゅっ。

そんな音を立てて、ユーリのくちびるを味わう。

「はふう……♪」

今日はこれくらいかな。

最後にくちびるを舌でなぞって、ユーリから離れた。

「にへへ、ちゅうしちやったあ♪」

うれしさや恥ずかしさでほっぺが熱い。

ユーリにちゅってすると、ぽわぽわした気分になって、心が気持ちよくなっちゃう。

ちよっと癖になりそうなくらい。

やんやん、ってくねくねしてたらユーリがもぞもぞ動き始めた。

体をやさしくゆすつたら、閉じてた目がゆっくり開く。

「おはよう、ユーリ。朝だよ？」

「……んう……」

「起きないといたずらしちゃうよ？」

もうしちゃったけどね。にへへ♪

ユーリはまだ寝ぼけてるみたいで、すぐに目を閉じようとする。

だから私は布団をひっぺがした。

でもあんまりやったらかわいそうだから、はがすのはお腹の上くらいまで。

「うう……寒いよミナ……」

「ほら、起きたらあったかいよ」

寒そうに体をよじってるユーリ。

そしたら、急に腕が伸びてきて捕まった。

「わわっ、ユーリ!？」

「んう……ミナは暖かいなあ。……よし、今日からミナは僕の抱き枕に決定」

そのまま布団の中に引きずり込まれて、ユーリに抱きしめられる。
あ、ユーリのおいだ……。

ちよっぴりほっぺが熱いけど、なんだか幸せな気持ちになっちゃう。

「……にへへ、ユーリの抱き枕になっちゃったあ」

胸板に顔をこすりつけて深呼吸。

鼻の中いっぱいユーリのおいが広がる。

前にユーリが私にしたのと同じ事をしてみたけど、これはなかなかすごい。

全身にユーリのおいがついちゃう気がして、すごくえっちだ。

「わぁ……私、ユーリのせいでえっちになっちゃったかも……」

って、ユーリ起こさないとお姉ちゃんに怒られちゃうよ！

このまま一日中くっついてたいけど、お姉ちゃんのげんこつは怖いもんね、うん。

ゆーわくを振り払って、私は体を離そうとする。

「わひゃうっ!？」

逃げようともぞもぞ動いたら、がしつと強く抱きしめられる。

そして、ユーリの右手は私のお尻をつかんだ。

そのままむにむにと揉まれる。

「やつ、ユーリっ、んっ、んあっ」

変な声が出る。

なんだか恥ずかしくなって、ユーリに文句を言おうとして顔を上げたら、目を閉じてくーすか寝てた。ほっぺを叩いて起こそうと思ったけど、両腕はガッチリ押さえ込まれてる。

抜け出そうと動いたら、

「きゃふっ、んあっ、あっ、やあん」

お尻をむにむにと揉まれる。

——う、動けないよお……。

鼻からはユーリのおいが入ってくるし、動いたらお尻を揉まれるしで、だんだん頭がぼわぼわしてきた。

結局、様子を見に来たお姉ちゃんに助け出されるまで私は捕まっていた。

私はげんこつ、ユーリはお説教をお姉ちゃんからもらったけど、私にげんこつするのはなんだか納得いかないよお！

それとユーリは私に何をしたのか全然覚えてなかった。

寝ぼけてるユーリにあんまり近付いたらダメ、ってお姉ちゃんにもこっそり教えておいた。

……べ、べつに、ユーリの抱き枕は私だけでいいの、とか思っ
てないよ？

朝ご飯を食べて洗濯物を干し終わって。
お昼までやる事のない私はふらふらと歩いてた。

「……はふう♪」

今日の私はちよっぴりごきげん。

朝に抱きしめられたせいで、服からユーリのおいがいっぱい。
うれしいような恥ずかしいような、不思議な気分。

なんだかユーリに抱っこされてるみたい。

そんな幸せ気分でてくてく廊下を歩いてたら、外から声が聞こえてきた。

窓をのぞくと、ユーリが庭を走り抜けてた。

そういえば、ご飯の後でとれーにんぐをやる、って言ってたつけ。
よく解らなかったけど、あれがきつととれーにんぐなんだよね。

私は庭の入り口の木に隠れて、邪魔しないように観察をする事にした。

「49っ、50っ、51っ」

ユーリは地面に寝転んで、上半身だけを起こしてた。

なんだっけ、ふ、ふ………腹筋？

そうそう、腹筋。

ユーリすごいなあ、腹筋50回も出来るんだあ。

しばらく見てたら、ユーリは庭で一番大きい木の下に座り込んだ。
休憩かな？

朝の仕返しに驚かしちゃおう、って思って、私は足音を立てないよ

うにこっそりこっそり近付く。
後ろまでやってきて、いきおいよく抱きつく。

「ユーリっ♪」

「わひゃあっ!？」

むぎゅっと腕を回したら、ユーリのおいがいっぱいいい。
ほわぁ……汗くちあいよぉ……♪

ユーリのおいにキュンキュンしてたら、ぐいって体を持ち上げられた。

そのまま膝の上に乗せられて、後ろから抱きしめられる。

頭にぽふり、って温かさが広がる。

くしくしとやさしく撫でられて、思わず顔がとろけそうになっちゃう。

その後2人でユーリの持ってた袋の中身を点検する事にしたの。

最初に袋から出てきたのは、青くて短いぼっこみたいなの。

「これは……折り畳み傘？」

他にも果物の絵が描かれた缶とか、キラキラした首飾りとかいっぱい出てきたの。

もしかしてユーリって商人さん？

……でも、普通はこの袋に入りきらないよね、この量。

実はユーリって整理整頓の達人さん？

次から次へと出てくる中身に、私はぼーんってしちゃった。
それから出てきた荷物を2人で倉庫に運んだの。

ユーリは私に軽い物しか持たせてくれなくて、自分は物がこぼれそうなくらい抱えてた。

時々ふらふらしながら歩いてく姿がちょっとかわいかった。

倉庫の2階で荷物をどさどさーって広げる。

首飾りや指輪だけでもちよっとした山になってるよ。

圧倒されてたら、ユーリに声をかけられた。

「ねえミナ、ちょっとこっち向いて」

「え、なあに？」

「いいからいいから。じゃあ目を瞑って左手を前に出して」

なんだろう？ちよっとドキドキしちゃうなあ。

言われた通り目を閉じたら、左手をやさしくきゅってされた。

くすぐたくてぴくん、ってしてたら何かが中指に当たる。

ユーリがもういいよって言ったから、ゆっくり目を開けてみた。

「わぁ……！」

私の中指に、キレイな指輪がはめられていた。

小さい私の指にしっかりぴったりな大きさの、銀の指輪。

何よりびっくりなのは、

——ユーリが、私の中指に……！

私たちのいる西の大陸では、男の人が女の人に指輪をはめる事には特別な意味がある。

左手の中指はさらに特別。

それは『あなたは私のもの』って意味。

つまり、私はユーリに『結婚してください』って言われたようなものの。

思わず顔が熱くなっちゃうけど、ここで慌てちゃダメ。

多分ユーリは、そういった事……この大陸の文化を知らない。

王国の事も魔法の事も知らなかったみたいだから、きっと別の大陸から来たんだと思う。

だから、これは逆に良い事かも。

今ならキセイジジツを作って、ユーリのお嫁さんになれる。

私はまだまだ子供だし、周りにはお姉ちゃんやエアリィさんもいるから、ユーリはいっぱいゆるわくされちゃう。

でも、私だってユーリが好きだもん！他のみんなには負けないからねっ。

心の中で手をぐって握って、私はユーリに笑顔を向けた。

「ありがとう、ユーリ♪でも、こんなに立派なの私がもらっているの？」

「うん、ミナにはいろいろお世話になってるからね。いつもの感謝って事で」

やっぱり解ってないみたい。

それなら、って私はずるい笑いを浮かべて言った。

「……にへへ、じゃあ私からユーリにお返ししないとね」

その後の事は……にへへ、ナイショ♪

だって思い出しただけで、体が熱くなってぴくんぴくんしちゃうもん。

そうそう、指輪を贈られたら、返事はちゅうでするんだよ！ちゅうして、私の全てをあなたに捧げます、って示すの。

つまりこれで、私はユーリ専用っ♪

だから今度ユーリが、その……さっきみたく、私のおっぱいさわりたくなったら……いい、いいよ？

恥ずかしいから誰もいないところで、ね♪

そんな気持ちも込めて、私はユーリに言った。

「……また、しょうね♪」

閑話——私の好きな人。（後書き）

今回は視点を変えてミナから見た世界を。

子供っぽく見せる為に漢字を平仮名に代えたり、言い回しを素直な表現にしたり……いやあ、難産でした。

そして今回はいつもより短い（もじかい）です。

それでも拙文に付き合って頂いた皆様に感謝を。

お茶会にお呼ばれます。

昼ご飯を食べて、ちょっとした雑用をこなして。

そんなこんなで時刻は午後2時。

何で正確な時間が解るかと言うと、袋から腕時計が出て来たから。

耐水耐圧耐衝撃が売りのゴツいやつだ。

取り敢えずアレは『四次元麻袋』ってあだ名を付けよう。

話を戻して、今僕は部屋の中にいる。

これまた四次元麻袋から出て来た、多分この世界風の衣服を着込んでいるからだ。

黒を基調として、肩から袖口まで蔦柄の刺繍が施されたシャツと、同じく黒の下地と側面に金の蔦柄が走るズボン。更にはこの編み上げ靴まで黒だ。刺繍はないけど、代わりに靴紐が金色。

——いやいや、派手っていうか趣味悪くない？

コスプレとかなら格好いい服装かも解らないけど、一市民が着る服装としてはかなり異彩を放ってる。

確かに、僕が最初に着てた学生服は背中がバックリ裂けてるし、亡くなった神父さんの服を借りっぱなしって訳にもいかない。

でも、だからってコレが代案ってのはどうだろう。

そんな事を考えてると、ドアをノックする音が聞こえてくる。

「ユーリさん、準備出来ましたか？」

「一応出来たけど……笑わないでね」

僕の声に、頭に？を浮かべながらシーナがドアを開けた。

シーナは僕の姿を見て、部屋の入り口で息を呑み固まってしまった。

——そりゃそうだよなあ。幾らファンタジーな世界でもコレは無いよなあ。

気恥ずかしさで頬に血が集まるのを自覚しながら、どうしたもんかと頬をぽりぽりと搔く。

と、固まっていたシーナがぼつりと呟く。

「……素敵です……」

「へっ？」

「あ、いえっ！何でもないですっ」

何だろう？つい「キモッ」とか「ダサッ」とか口に出ちゃったのかな。

……考えてると悲しくなるから止めよう、うん。

それにシーナは良い子だからそんな事言わないもんね！

や、まだ年聞いてないけど多分僕とそう変わらないと思う。

同世代の娘さん捕まえて良い子も無いか。

取り敢えず現実逃避を止めて真実へ一歩踏み出してみる。

「えっと……ど、どうかな？」

意を決して聞いてみる。

願わくばポジティブに受け取れる罵倒でありますように！

「服の落ち着いた気品がユーリさんの魅力を引き立てていてすごく格好いいですよ。おとぎ話に出て来る勇者様みたいです」

——イイイイヤッホオオオオイ！

まさかの全肯定きたあああ！

お世辞でも何でもいい、罵倒じゃなかったから何でもいい！
嬉しさの余りシーナの手を握りぶんぶん振りたくる。

「ありがとうシーナ！」

「きゃー！？えっと、あの……どういたしまして？」

シーナは戸惑ってるみたいだけど、今は僕の感謝を受け取って欲しい。

小さい頃から妹の着せ替え人形役をやっていた成果がここで出たのかな。

妹よ、天国から見てるか？お兄ちゃんは妹のおかげで格好良くなれたよ。

あ、いけない。妹の事思い出したら涙がちよきれそうだ。

今度は突然しんみりしだした僕に、シーナは更に戸惑いを深くした。

「あ、あの、ユーリさん？」

「ん、ああ、大丈夫。ちよっと色々思い出しちゃっただけだから」
「そう、ですか？」

握ったままだったシーナの手を離す。

細くて白くて小さな手。

細工品のような、って言葉はシーナの為にあるんだなあ。

そんな風に思いながら、僕はシーナに思い付いた事を言う。

「先にミナと外で待っててもらえる？」

「どうかしたんですか？」

「せっかくだから、お土産持って行こうと思って。勿論2人の分もあるよ」

「私達にはそんな気を使って頂かなくても……」

「いいからいいから。じゃ、ちよっと行ってくるね」

何か言いたげなシーナを残して、僕は倉庫へ向かう。

ふっふっふ、3人共喜んでくれるかな？

ニヤニヤしながら階段を駆け下り、教会の玄関を抜ける。

朝より数段傾いた太陽に出迎えられ、一瞬だけ目が眩んだ。

すぐに目は慣れ、倉庫の古びた扉を開けて、階段を上へ。

とんとんとん、とリズムを刻みながら2階に到着。

あったあった、みかんに桃……ついでにパインもあった方がいいかな？

僕は倉庫の隅に置いておいた麻袋に手を突っ込み、無造作に中の物を掴み取る。

うん、あったあった。

目的の物を腕に抱えて、僕のニヤニヤは更に濃くなった。

3人の――特にエアリィさんのびっくりする顔を早く見てみたいなあ！

「3人共、いらっしやい。今か今かと待ちわびたよ」

「エアリィさん、今日はお茶会に呼んで頂きありがとうございます」

「はっはっは、相変わらずだなシーナ君は。もっと気さくに話してくれても構わないよ？」

「エアリィさん、こんにちは！」

「こんにちは、ミナ君。今日も元気いっぱいだね」

「さつき振ります。あ、これお土産です。みんなで食べましょう」

「ああ、わざわざ済まないね。ありがたく頂くとしよう。……それはそうとユーリ君、すごい格好だね。王国の舞踏会にでも出るのかい？」

「うぐっ。に、似合ってますか、やっぱり」

「いやいや、余りに素敵なのでね。貴族様よりも格好いいよ」

そんな会話を交わしながらエアリィさんの家にお邪魔する。

出迎えてくれたエアリィさんは朝の時とは違って、薄い水色のワンピースを着てた。

清楚な雰囲気と柔らかな微笑みが合わさって、どこかのお姫様みたいだ。

家も4LDKくらいありそうなログハウスで、小綺麗な内装が落ちていた雰囲気醸し出してる。

もうお茶の用意はしてあったようで、いい匂いが漂ってくる。

「まあ、掛けて待っていてくれ。すぐにお茶を持ってくる」

「あ、僕もお手伝いしますよ。お土産も広げようと思いますし」

「そうかい？じゃあミナ君とシーナ君はそのまま座っていてくれ」

足取りも軽やかなエアリィさんに続いて台所へ。

お茶会が余程楽しみだったのかひどくご機嫌な様子。長い耳もピクピク動いてるし。

触りたいなあ。ハムハムしたいなあ。

と、僕の邪な視線に気付いたのかエアリィさんが振り返る。

どうしたんだい？と微笑みを浮かべて僕を見る姿が、もうたまらんです。

「ちょっと大きめの器を3つと、フォークを人数分お願いします」

「ああ、解った」

僕はみかんの缶詰めを手にとると、缶切り片手に開け始めた。

きこきこきこ、と軽快なリズムに乗せて鼻歌なんかも歌っちゃってみたり。

「集え、銀河の守護神、♪砕け、悪の野望を、♪」

「なかなか勇ましい歌だね、ユーリ君。何を謳い上げた曲なんだい？」

「全てを手に入れるんだ……♪あ、これですか？この曲は昔妹が僕のテーマソングとして作ってくれたんですよ」

「そうだったのかい？いやはや、才能に溢れた妹君だね」

ちょっと自慢げになる。

妹はかわいくて賢くて優しくて、まるで天使みたいな子だった。絵も上手だし声も綺麗だし作詞作曲も出来て運動も得意。

その上僕を「おにいちゃん」って慕ってくれたし。

え、シスコン？ハハハ、何をおっしゃる。

っと、もう一周してみたいで缶の蓋が上がっていた。

手を切らないように注意しつつ、蓋を開けて木のボウルに中身を移す。

うん、まずみかんは出来上がり。

エアリィさんを見ると、目をキラキラさせてみかんを見ていた。

「ゆ、ユーリ君っ。この美味しそうなのは一体何だいっ？」

テンションが振り切っているのか、少し語尾に力が入ってる。

なんて言うか、初めて見るご馳走を前にした子供みたいですごくかわいい。

「これはみかんっていう、僕の国で一般的に食べられていた果物をシロップ漬けにしたものですよ。他にも桃とパイナップルって果物も持ってきました」

「なるほど、これは、その、ううむ。いや、はっきり言おう、早く食べたい！」

言いながらも目はみかんに釘付けなエアリィさん。
実はちょっぴり食いしん坊さんなのかな？

なんて事を考えながら、僕は桃の缶詰めに手を伸ばした。
開けて中身を移す度に、エアリィさんは黄色い悲鳴というか、感嘆
の声を上げる。

どの世界の女の子も、果物には弱いんだなあ。

予想以上にかわいい反応を見せるエアリィさんを微笑ましく思いながら、僕は缶詰めの空を片付け始めた。

「ずいぶんと盛り上がっていたみたいですね……え、何ですかこれ？」

「ん、なんだか甘い匂い……ほわぁっ、ナニコレ!？」

器を持ってリビングに戻ると、2人共目を丸くしてた。

やっぱりこの世界の食べ物と地球の食べ物は少し違うみたいだ。

シーナはフォークで桃をつんつんして、ミナはパインに鼻を近づけて匂いを嗅いでる。

エアリィさんは待ちきれない様子で視線をみかんに向けながら、香草茶——多分ハーブティー的なものを注いでいる。

やばい、みんなかわいすぎて鼻血出そうだ。

取り敢えずみんなにお茶が行き渡ったのを確認して、フォークを握らせる。

「今日集まってくれた皆に精霊の祝福があらん事を……。待ちきれん、突撃だ!」

「おー!」

ファンタジー特有の、食べる前に捧げるお祈りが見れるかと思った
らそんな事はなかった。

勇ましくフォークを握り締めるエアリイさんと、腕を振り上げてノ
リノリなミナ。

シーナなら修道女だし真面目にお祈りしてるハズっ、と目を向けた
ら既にお祈りを終えて臨戦態勢だった。

いやいや、何倍速でお祈り終わらせたのん？

女の子パワーに圧倒されて若干言葉が怪しくなる僕。

シーナは桃を小さく切り分け、とても上品に食べている。

うん、お嬢様っぽくてかわいい。

ミナは口いっぱいパインを頬張ってる。

なんだかりスみたいでかわいい。

エアリイさんは、みかんをいっぺんに5個くらいフォークに刺して
口に放り込んで、幸せいっぱいな顔でもぐもぐしてた。

やだ、なにこのかわいいイキモノ。

今日はエアリイさんの破壊力が半端じゃないなあ、とみんなを見て
ヘラヘラ笑いながら、僕は温くなった香草茶をすすった。

「で、取り敢えず今日はみんなに僕の事を知ってもらおうかと思う
んだ」

果物との死闘も終わってまったりとした空気が流れ始めた頃、僕は
そう切り出した。

その言葉にエアリイさんとシーナは姿勢を正すけど、ミナはへにや
つと首を傾げる。

「ユーリの事？」

「そうそう、僕の事。例えば……ミナは僕が、別の国から来たって言ったら信じる？」

「うん、ユーリの事ならなんでも信じるよ！」

いや、嬉しいけどね、そうじゃないんだよ。

聞き方を間違えたかなあ、と頬をぽりぽり搔いているとシーナが助け船を出してくれた。

「確かに、この国に住む方なら知っている事を、ユーリさんはご存知無かったですからね。異国の方と考えるのが自然ですね」

「ありがとうシーナ、まあ、言いたいのはそのう事。で、こんな事言ったら冗談だと思われるかもしれないんだけどさ」

僕はみんなの顔を見渡して、爆弾を投下してみた。

「もし、僕が『別の世界』から来たって言ったら、信じる？」

うわ、みんなぼかーんってしてる！

そりゃそうだよなあ、いきなり異世界人です、なんて言われてもなあ。

何言ってるんだコイツ的な視線を向けられて、最悪脳に蛆が湧いたって思われるのがオチ……いやいや、みんなを信じるんだ。

果物であんな幸せそうに笑う女の子達ならそんな酷い事は言わないハズ！

戦々恐々としながらみんなの様子を窺ってみる。

ミナは、僕が何を言っているのか解っていないみたい。

そもそも別の世界って何？って顔してる。

シーナは軽くパニックになってるみたい。

うん、その気持ちはよく解るよ。最初僕もパニックだったからね。

エアリィさんかというと、何やら考え込むように僕をじっと見てた。

あ、その目で僕を見ちゃダメ、なんかゾクゾクきちゃう。

「そう言ったって事は、ユーリ君自身そう思える理由を見つけたのかい？」

おおっ、エアリィさんひょっとして信じてくれた！？

ちよっと感激しながら、僕は口を開いた。

「僕の世界と違う所を見つけて、そう考えたんです」

「違う所、とはなかなか抽象的だね。例えば何が違ったのかな？」

「そうですね、一番の違いは……この世界に魔法がある事、ですかね」

僕の言葉に耳をピク、と動かす。

反応が解りやすくていいな。

「僕のいた世界では魔法は空想の産物でしかありませんでした」

「それは大きな違いだね。少なくとも、私からしてみれば魔法が存在しないなんて信じられないよ。空気と同じ、在って当たり前のものだからね」

「それから、エアリイさんみたいなエルフもいません。会話が出来る程の知性を持った生物は人間しかいません」

「それは……絶滅した、という訳ではなく？」

「ええ、最初から人間しか種族として存在していません」

ううむ、と考え込むエアリイさん。

別の大陸にもエルフや獣人なんかが大勢いるって話だし、全体から見ると少数民族な人間しか存在しない世界ってものが想像付かないんだろう。

「ただ、幾ら僕が自分の世界と違う所を並べても、僕が異世界人だと証明するのは難しいですけど」

「え、何ですか？」

それまで聞き役に徹していたシーナから疑問の声が上がる。

答えようとした僕より早く、エアリイさんが綺麗な声を響かせた。

「簡単な事だよ、シーナ君。彼は自分の世界と私達の世界、両方を知っているから2つの世界が違うものだ判断出来る。しかし私達は彼の世界を知らないから、私達の世界を基準にする事でしか思考出来ない。つまり、彼がどんなに説明しても、私達からしてみれば証拠の無い作り話にしか聞こえない、という事だよ」

僕が言いたかった事を完璧に全部言われちゃった。

流石エアリィさん、知的な所も素敵です。

ただ、ミナが睨むような視線を向けているのが心苦しい。

最初から僕を全肯定してくれるミナにしてみたら、今のエアリィさんの話は僕の言葉を信用してないって取れるからなあ。

……いや、僕もエアリィさんがどう思ってるのか解らないからドキドキだけだね。

「エアリィさんの言う通り、僕が異世界人だって証拠が無いんだ。異世界が在るって証明する方法も解らないし」

「おや、証拠ならここに在る……在ったじゃないか」
「へ？」

微妙に言い直して、エアリィさんは空になったボウルを指差す。

そこに在ったもの……みかん？

「私の知る限り、どの大陸にもこんなに美味しい果物は無いよ。それにこれが入っていたあの缶。あれを作る技術も、この世界には無いものだ」

ああっ、言われてみれば！

さっきまで散々その事でニヤニヤしてたのに、すっかり忘れてた。みんなの笑顔がかわいかったせいにしておこう。

ん？という事は……、

僕の視線をいたずらっ子のような笑みで受け止めるエアリィさん。

「ふふ、意地悪な言い方をしてすまなかったね。いやなに、存外君が困ってる姿がかわいかったのね」

「ああっ、エアリィさん僕をからかってたんですね!？」

「ははは、許してくれないか。ただ、私は最初から君の言う事を信じていたよ?」

そう言って手を合わせ上目遣いに僕を見るエアリィさん。

そんな事で騙されな……騙されました。

だって反則級にかわいいんだもん! ああ、こうやって男は女の子に騙されていくんだなあ。

そんな事を考えていると、ミナが僕の膝に座り抱き付いてきた。

そのまま首だけエアリィさんに向けて、威嚇するように睨んでいる。

「ユーリをいじめたらダメなの!」

ミナの健気な言葉に僕のハートは撃ち抜かれた。

もう、ズギューンって。

頭を優しく撫でると、くすぐったそうにすり寄ってくる。

慌てたのはエアリィさんだ。

「い、いや、いじめた訳ではないよ?」

「でもユーリを困らせて笑ってたもん!」

「そ、それはなんと言うか、ミナ君もかわいいと思わなかったかい?」

「それとこれは別なのー！」

あ、ミナも思っただ。

言っとくけど、男にかわいいは褒め言葉じゃないんだからね？

やいのやいのと賑やかになる2人とは対照的に、シーナは黙ったまままだ。

どうしたんだろ？と首を向けてみると、丁度顔を上げたシーナと目が合った。

「なるほど……ユーリさんは異世界人だったんですね」

「え、いまさら！？」

マイペースさんめ。

意外とシーナって天然さん？

普段しつかりしてるから、こういうシーナはなんか新鮮な気がする。取り敢えず収集が付かなくなったから、僕は香草茶をすすってまったり流れに身を任せる事にした。

投げっぱなし？勿論。

ハハハ、流されるのは得意なんですよ。

場所を移して教会の裏庭。

あの後僕に魔法が使えるのか気になって、エアリィさんに教えてもらう事になった。

すぐに仲直りしたみたいで、ミナはエアリィさんと一緒に的を準備

してる。

仲睦まじい2人を見てると和み度数が半端じゃない。

シーナはと言うと、万が一の時の為にライブの杖と傷薬、それに包帯なんかも用意しておくって教会の中へ引っ込んでいった。

大げさに思えるけど、失敗したらそれだけ危険って事だよね。

よしっと気合いを入れて、僕は気持ちを新たにした。

丁度準備も終わったみたいでやり遂げた感を滲ませながらミナが駆け寄ってくる。

そのままぽふって抱き付かれ、ミナは褒めて褒めて、としっぽを振る子犬みたいにじゃれついてきた。

頭をくしくし撫でると気持ち良さそうに目を細める。

「はぁ……癒されるわぁ」

「にへへ、ユーリの手やさしいから好き♪」

ミナを撫でているとエアリイさんも僕の元へやってきた。
ほぼ無意識に手が伸びて、

「うなっ!？」

気付くと僕の右手はエアリイさんの頭に。

ナデナデナデナデ。

さらさらの髪の毛は手触りが良くて、いつまでも触っていたくなる。
っていうか「うなっ」って。

エアリイさん猫みたいな声上げたね。かわいいからいいけど。

——って、僕は何をやってるんだ!?

つい勢いのままぬエアリィさんの頭撫でてたけど、ひょっとして怒ってるかな?

うわぁ、エアリィさん俯いて肩ふるふるさせてるし。

ていうか、大人の女性を子供扱いしちゃ怒るよね、普通。

あ、でも撫でると気持ち良いや。

なでなでなでなで。

勿論左手でミナを撫でるのも忘れない。

おおう、両手が幸せいっぱいだ。

「——何してるんですか、ユーリさん」

突然背後から聞こえてきた声にびくうっとする。

振り向いたら半目で僕を見るシーナの姿が。

「いや、えっと、なんていうか」

からからから。

いい感じに僕の頭は空回りを披露した。

別にやましい事をしてた訳じゃないから慌てなくてもいいけど、小心者でチキンな僕はこういう時に思いつ切り慌てる。

シーナは溜め息を吐いて、腰に手を当てるとお説教を始めた。

「いいですかユーリさん、年上の方を子供扱いしてはいけません。ミナのように小さい子ならまだしも、エアリイさんのように大人の方の頭を撫でるなんて失礼ですよ。まだエアリイさんだったから良かったですけど、貴族様相手にやってしまったら不敬罪で投獄される事もあるんですから。だいたいユーリさんは礼儀を知らなすぎます。異世界人だからといって、全てが許される訳ではありませんからね。丁度いい機会です、この際礼儀作法をみっちり教えてあげます」

うわぁ、シーナのマシンガンお説教タイム始まったよ。
スイッチ入ると途端に喋り出すんだよねえ。

「い、いや、シーナ君。せっかくだけど、今は魔法の練習だから、その話は夕食後にでもじっくりやってくれないか？」
「む、そうでしたね。仕方ありません、お説教はまた後でやりましょう」

ナイス、エアリイさん！

お礼に後でみかんの缶詰めと缶切りをあげちゃう。

ミナは僕の陰に隠れて様子を窺ってた。シーナのげんこつ痛そうだったもんね。

取り敢えずシーナも引き下がったくれたし、心置きなく魔法の練習が出来る。

ミナも僕から離れて、後ろの長椅子に座って足をぶらぶらさせてる。

「それじゃあ、やり方を教えるよ。まずは体を楽にしてみてください」

言われた通り全身から無駄な力を抜く。魔法の練習、って聞いて思わず体が緊張してみたい。

「次に意識を体の内側に向けるんだ。目を閉じると集中しやすいかもしれないな。全身の血流を感じるように、指先、腕、足先、太腿、背中、首、心臓なんかを意識してみるといい」

目を閉じて意識を巡らせてみる。

血流を感じる、ってどんな感覚なのかな？

運動した後には耳の血管がドクンドクン煩く鳴るような感覚かな。

あれだったらイメージしやすいんだけど。

まあ、試しにやってみよう。合ったらエアリイさんがなんか言ってくれるはずだし。

最初は心臓から。首、左腕、両足、右腕って順番に意識を広げていく。

「すごいな、ユーリ君は。もうコツを掴んだようだね、今度はその感覚を指先に集めるように意識してごらん」

やっぱりあの感覚で合ってたみたいだ。

今度はそれを指先に集める……何かイメージが有った方がやりやすいよね。

なんかそれっぽいイメージ……あ、魔○光殺砲でいいか。

指先に意識を集めて、と。
なんだか指先が熱を持ってきた気がする。

「充分出来たと思ったら、指先を対象——あの的に向けて、使いたい魔法を唱えるんだ。ファイアーの魔導書があるから、これを使ってみると」

「ファイアー！」

あ、なんか先走って呪文唱えちゃった。

さっきミナとエアリィさんが木の枝を組み合わせて作った人形の足の元から、高さ2mくらいの火柱が上がる。

でもすぐに炎は消えちゃって、失敗したかな？って思ったんだけど、よく見たら的が燃え尽きてて灰一つ残って無かった。

——うわあ……ファイアーって名前でしょぼいの想像してたけど、威力凄まじいなあ。丸く地面禿げてるし。

なんとも言えない表情でエアリィを見ると、真っ青な顔をしていた。

え、もしかしてなんかマズかった？

「……ユーリ君、正直に答えてくれ。今、君は、何をした？」

「え、えっと、言われた通りのを狙って呪文唱えただけなんですが」
「質問を変えよう。君は今、魔導書を持っていたりしないかい？」

「持って無いです……っていうか、魔導書無いまま魔法使えちゃい

ました」

「……そう、か。いやはや、つくづく君は私を驚かせてくれるね」

感心半分呆れ半分、といった感じでエアリィさんは苦笑を浮かべた。僕も自分にちよつと呆れてるけどさ。

この世界の理を無視して、理魔法を放つてのもどうなんだろう。理魔法といえば、この世界の魔法ってファイオーエブレムっぽいよね。

でもエルフや獣人もいるし、まるつきり同じじゃないよねえ。

その内マムクートとか出るのかな？

竜族の女の子とかかわいいんだろぅなあ。

しかも合法ロリかぁ……ごくつ。

「……いや、信じらんない気持ちは解るがそろそろ帰ってきたまえユーリ君」

おっと、現実逃避してたらエアリィさんに怒られちゃった。

失敗失敗。

「取り敢えず、この魔導書を渡しておくよ。誰かに見られてもこれで言い訳出来るだろうからね」

「ありがとうございます。まあ、極力誤魔化すか使わない方がいいですよね」

「加えて異世界人だというのも黙っていた方がいいだろうね。心無い人が聞けば研究の為に飼いや殺しにされるか、危険だと思われて命を狙われるか」

「うへえ……おっかないですね」

一気に話が血腥くなってきた。

ゲームなら幾らでも返り討ちにしてきたけど、現実として降りかかると考えたくも無い話題だね。

それにしても、つくづくテンプレだなあ。

異世界に飛んだらチート級の魔法が使えるとか、周りは美少女ばかりだとか。

まあ、今日の所は平和に終わりそうだし、特に心配は無いかな。

「山賊だ！山賊が出たぞお！」

ああ、もう！

どこまでテンプレな展開が続くんだよお！

したくなかった初体験です。

山賊が現れたって聞いて、村は大騒ぎだった。

村の自警団が防衛と迎撃に出るようで、エアリィさんもそっちへ向かった。

僕はと言うと、村人の避難誘導と教会の警戒に当たっていた。

いやいや、怖くて戦場なんか行けないって。

足腰の弱いお婆さんを背負って教会へ運んだり、鳴子を設置したり。僕に出来る精一杯の事をやる。

本当にいざとなったら……魔法で、山賊をやっつける。

出来れば戦いたくもないし、その辺の事は考えたくもない。

シーナとミナは教会の中に避難させて、村のみんなと待機させてる。今は村の東側から山賊が攻めて来ているみたいだけど、こういうパターンの戦いだと北の森を抜けてくるはみ出し者が1人くらいいるんだよね。

——って、落ち着け僕。思考が分裂し始めてるじゃないか。

色んな事を思い浮かべては考える前に別の事を思い浮かべて気を逸らす、僕特有のパニックだ。

普段ならいいけど、今はそれが命に関わってくる。

だから僕は深呼吸をして無理矢理にでも落ち着く事にした。新鮮な空気が肺を満たして、少し頭が冷える。

——よしっ、ちょっと落ち着いた。

妙な緊張で強張っていた右手の握り拳をほどく。

大丈夫、いざとなったらファイアーで脅かしてやればいいんだ。

流石に持っている武器が手元だけ残して燃え尽きたらびっくりするだろうし。

それに上手く撃退出来たら、ミナがキスしてくれたりして……？

でへへ、と妄想に頬を緩ませる。

おっといけないいけない、ちゃんと警戒しないと。

敵なんか来る訳無いって決めつけてる歩哨は間違い無くスナイポされてお陀仏だし。

でもエアリィさんは大丈夫かなあ？

心配はいらないよ、って僕に微笑みながら弓と矢束を背負って家の外へ。

その姿が格好良くてちよつと憧れた。

凛々しいエアリィさんもいいなあ。

僕がまだ避難してない村人を探しに出た所で、村の入り口で弓を使える数人と合流して引き連れて森の中へ向かうエアリィさんを見掛けた。

なるほど、森の中から弓を射掛ければ、すぐには見付からないだろう。

自警団の人達は鉄板をくつつけまくった、ガチムチアーマーみたいな鎧を着て行った。

あれならレイピアでも使われない限り致命傷は負わないだろう。

まあ山賊がレイピアなんて持ってないよなあ。手斧を振り回してそうないメージがある。

——つと、また思考が走ってるよ。落ち着けて僕。

妙な高揚と緊張が混ざって、自分じゃどうしようも無いくらい浮き足立ってる。

やっぱり僕ってチキンだなあ……って、ちょっと自嘲してみる。シーナや、ミナだって取り乱さずに他の人達を気に掛けていたっていうのに、僕は見えない何か相手に独り相撲状態だ。

そんな落ち着かない時間が、5分、10分と過ぎた頃。

『カランカラン!』

一瞬息が、心臓が止まる。
来た。

鳴子が響いたのは教会の裏手に広がる、ちょっとした藪の中。
震える足を叱咤して教会の裏庭へ急ぐ。
教会をぐるっと囲む2mくらいの塀を、勢いを付けてよじ登る。

『ヒュン!』

「うわぁっ!?!」

目の前を何かが通り過ぎる。それに驚いてバランスを崩し、地面にべちゃっと落ちた。

この地面に這いつくばる感じ、久し振りだなあ。

っと、ふざけてる場合じゃない。

一歩間違ってたら死んでたね、アレ。

立ち上がって前を見ると、筋肉ムキムキでスキンヘッドで煤けたタンクトップとズボン姿の男性が1人。

「うわ、テンプレ通りの山賊だ」

「あぁん!？」

「柄も悪いなあ、って山賊だから当たり前か」

ある種の感動を覚える。

山賊は右手に切れ味の悪そうな大きい手斧を提げて、僕を見てニヤニヤ笑い出した。

「辺境の村に貴族の坊ちゃんとはツイてるぜ。たんまり金が手に入りそうだ」

え、貴族？どこにそんな人が？

キヨロキヨロと辺りを見渡すけど、そんな人は見当たらない。

ああ、貴族って僕の事か。やっぱりこの服一般的な服装じゃないんだよ、きつと。

ちよっと天然だった僕の行動を、山賊は素敵に勘違いしていた。

「残念だったなあ、お前の味方は誰もいないぜ？逃げ道も無いようだしなあ」

下卑た笑い方をする山賊。

あれが俗に言う悪い笑みかあ、僕には真似出来そうにないなあ。ともあれ、油断している今がチャンスだ。

1回だけなら奇襲も出来るし、上手くいけば退かせる事も可能だ。

——よし、落ち着け僕。絶対に成功させるぞ。

出来るだけ体を動かさないように意識しながら、少しずつ指先に感覚を集中させる。

さっきの練習の時よりも、強い熱と鼓動を感じる。

狙いは右手に持つ手斧。

しっかりと見据えて言葉を放つ。

「ファイアー！」

僕の掛け声と同時に、山賊の右手に火柱が上がる。

でもそれは一瞬で掻き消える。

僕のように注視してなければ視界に赤いフラッシュが焚かれただけにしか見えないだろう。

そこから、更に動きが生まれる。

手首から先を失った腕が跳ね上がる。それまで支えていた重さが手首毎無くなった反動だ。

「うおあっ！？な、なんだこりゃあ！？」

跳ね上がった自分の腕の動きに、次いで自分の手首から先が消失している事に顔を驚愕で歪める山賊。
間髪入れず、僕は声を張り上げた。

「今のは脅しだ！大人しくしないと、次は命を失うぞ！」

声が震えなかった自分を褒めてやりたい。

だって、あんな、手首から先が無くなるとか思ってたし！

やだよお、グロいよお、威力高過ぎだつてば。

断面は炭化したのか真っ黒だし。

出血は無いみたいだから、遠目から見たら特撮の特殊メイクに……
ごめんなさい、無理です。見えません。

胃から上がってくる酸っぱい液に辟易しながら、僕は山賊を睨み付けた。

勿論視線は山賊の眉間に集中させる。じゃないと吐きそう。

対する山賊はまだ何が起きたのか理解出来ていないみたいで、目を白黒させている。

けど、僕がファイアーの魔導書を構えているのを見て、何が起きたのか悟ったようだ。

忌々しげに僕を睨み返す山賊。

「てめえ、舐めた真似してくれるじゃねえか！」

「っ、動くなつて！」

わざと魔導書を前に突き出すように見せる。けど山賊はそんなのお構いなしに、僕へ突っ込んできた。

「うわあっ!？」

「このガキ、ちょこまかと！」

「ちょ、ま、危ないって！」

僕の首くらいある太い腕を振り回す山賊。

それを不格好だけど何とか避けていく。

冗談じゃない、あんなの当たったら肋骨折れるって！

山賊は怒り狂って僕を殴り殺そうと腕を振り上げる。

顔や脇腹を拳が掠める度、新たな恐怖が湧き上がってくる。

初めの内はまだ機敏に反応出来たけど、怖くて体が言う事を聞かなくなってきた。

ぎりぎりの所で避け続けるけど、遂に壁際へ追い詰められた。

「手間掛けさせやがって。悪あがきもここまでだ！」

ヤバい、逃げたくても膝に力が入らない。

恐怖と疲労で地面に張り付いた両足が、がくがく震えだした。

いきなり濃厚に薫りだした死の臭いに僕の思考は恐怖一色に染まる。

左腕を振り上げる山賊。

眼前に迫り来るそれを、僕は混乱と恐怖に塗れた眼で見ていた。

『――ヒュン』

突然生まれた音と共に、山賊の左腕が左に逸れる。

僕の顔を掠めて背後の壁に当たった衝撃が背中を伝う。多分扉にはヒビが入ったんじゃないだろうか。

目に飛び込んできたのは山賊の肘に刺さった一本の矢。

さっきの音は矢の風切り音だったみたい。
不意に山賊の体が揺れて、そのままぐらつと地面に倒れ込んだ。
その側頭にもう一本矢が刺さっていた。

「大丈夫か、ユーリ君っ!？」

聞こえた声に、僕はやっと状況を理解した。
右へ振り向くと弓を持ったまま駆け寄るエアリイさんの姿が。
ああ、エアリイさんが女神様に見える。

「怪我は無いかい？向こうは片付いたから様子を見に来たんだが、
間に合って良かったよ」

ぺたぺたと僕の体を触って怪我が無いか確認する。
傷を負ってないのが解りほっとした笑みを浮かべるエアリイさんを見
て、僕の緊張の糸が切れた。
思わず両手を広げてエアリイさんに抱き付いた。

「エアリイさあゝん！」

「な、わ、ユーリ君っ!？」

「怖かったよお。殺されるかと思ったあ」

「だ、大丈夫、ユーリ君をイジめる奴は私が成敗したから!だから、
その、ユーリ君っ、落ち着いてくれ」

「大丈夫?怖いのではない？」

「あ、ああ、大丈夫だよ」

「えへへえ、エアリィさん強くて優しいから好き」

「うなっ!? ちょ、待ってくれ、ユーリ君っ!?」

「むぎゅう」

「—————っ!?」

……はい、落ち着きました。

さっきの僕は黒歴史なので忘れて下さい。忘れろ、忘れるんだあ! ……まあアレだよ、恐怖の反動でちょっぴり幼児退行しただけさ。

今じゃすっかり落ち着いて普段通りの僕に戻ったさ!

って言いたいけど、僕は今エアリィさんに背負われてる。

情けない事に腰が抜けて立てないんだ。

色々恥ずかしい所も見せちゃったし、エアリィさん呆れてなかったらしいなあ。

「ユーリ君、もっとしっかり掴まってくれ。落ちてしまうよ?」

「ああすいません。重くないですか?」

「軽過ぎるくらいだよ。まるで女の子みたいだ」

女の子みたい、かあ。

ちょっぴりショックを受けつつ、僕は前に回した手をエアリィさんに巻き付けるように動かしてしがみついた。

「きゃん!」

かわいらしい悲鳴と左手の掌に広がる柔らかく幸せな感触。
擬音で表すなら、もにゅっ、と言った感じ。

ちようと掌にぴったりフィットする大きさで、沈み込んだ指を優しく包む弾力性。

——これはまさしく、おっぱい！

って、幸せに浸ってる場合じゃない。

ただでさえ格好悪い所を見せてるのに、この上エロ魔神だなんて思われたらエアリィさんに嫌われちゃうよ！

慌てて手を退けようとするより一瞬速く衝撃が左手首を襲った。

『バリン！』

突然の衝撃に僕もエアリィさんも驚いて後ろに倒れ込む。

あ、エアリィさんの髪からいい香り。

思わずまったり仕掛けた僕の目に映ったのは、左手首の時計に突き刺さった鉄の矢。

液晶が割れ中部まで食い込んでいるけど、底部の板に遮られて僕の手首には傷一つ付いて無かった。

慌てて矢の飛んできた方を見ると、森の中で大柄な男が僕に弓を構えているのが見えた。

恐らく山賊の一味だろう。

僕達が無傷なのを見て次の矢をつがえ始めた。

——今の矢、エアリィさんを狙ってた？

結果的に僕の時計に命中したとは言え、それはイレギュラー。最初に狙ってたのはその奥、エアリィさんの心臓付近だ。

——アイツは、エアリィさんを殺そうとした？

僕の冷静な部分が早く逃げろ、って叫んでる。

エアリィさんを担いで物陰に走れと悲鳴を上げる。

でも、アイツが何をしようとしたのかを理解した時、僕はぶち切れた。

——許さない。

上体を起こしてアイツを睨み付けた。

頭から熱が全身に回って、燃えているような感覚が広がる。

アイツから僕を庇おうと動くエアリィさんを優しく抱き締めてその動きを封じる。

今なら全身に流れる魔力を感じられる。

アイツがつがえた矢が空を疾りながら僕の頭部へ向かう。

「ユーリ君っ！」

叫ぶように僕の名前を呼ぶエアリィさん。

鏃が僕の額数cmまで迫って、そのまま消失した。

なんの事は無い、鏃から順に熱で蒸発させてやっただけだ。

周囲に汗ばむ程の熱が広がり、一瞬で収束する。

僕の胸の辺りから見上げるエアリィさんは、今日の前で起きた事が理解出来ないのかポカンとした顔をしていた。

そっと抱き寄せ、長い耳に口を寄せて囁く。

「大丈夫、エアリィさんには傷一つ付けさせないから」

視線を外しアイツを睨み付ける。

今の芸当を見て分が悪いと悟ったのか、こちらを警戒しながら撤退を始めようとしていた。

逃げられるとも思ってる？

エアリィさんを傷付けようとした報いは受けて貰わないとね。

出来る限り苦しんで死ぬような魔法がいいなあ。

暗い思考を巡らせていると、一つの魔法が脳裏に浮かぶ。

ある程度離れて大丈夫だと思ったのか、アイツは背を向けて駆け出す。

その背中へ落とすように、僕は呪詛を呟いた。

「ノスフェラート」

言い終えると同時、アイツの周囲に紫色の暗い炎が浮かび上がる。
人の頭程の大きさを持つ炎は五肢に喰らい付くようにアイツへ殺到

した。

叫ぶ間も与えられないまま、暗い炎が全身を喰い尽くす。
吸血鬼の名を冠するこの魔法は、死を与えながら『死』という安息を許さない。

永遠に近い時を掛けて少しずつ魂を喰らい、耐え難い苦痛を最期の時まで与え続ける。

しかも、喰われた魂は転生の輪廻には戻れず永久に失われるんだ。
不意に、腕の中で震える動きが生まれる。

視線を下げると、僕の腕に抱かれたままのエアリイさんと目が合った。

見上げる瞳にはありありと恐怖の色が浮かんでいる。

——怖がらせちゃったかな？

出来るだけ優しく声を掛ける。

「エアリイさん、怪我は無いかな？」

「あ、ああ、大丈夫だよ。ユーリ君こそ平気かい？」

「うん、僕は大丈夫。……良かった、エアリイさんが無事で」

ほっとした途端、強烈な眠気が襲ってきた。

そのまま後ろにパタッと倒れ込む。

少し赤みが差してきた青い空が広がっていた。

瞼を閉じる直前に浮かぶのはエアリイさんの事。

——情けない所もえっちな所も、怖い所も見せちゃったなあ。それでも嫌われちゃっても、エアリィさんが無事だったから……いっか。

色々悩みが増えました。

山賊騒動から2日。

とある理由で僕の精神力はガリガリ削れてきている。

1つは自分の責任というか、僕が受け止めなくちゃいけない事。

あの時僕は、僕の意志で、1人の人間を殺した。

それも正当防衛なんかじゃない。

小さな子供が蟻を踏み潰すみたいに、僕は人間の命を弄んだ。

単に殺した訳じゃない、僕が思い付く最も残虐な方法で殺したんだ。それを思い出す度、胃から酸っぱいものが上がってきて、胸の辺りが酷く病む。

——やっぱり、ゲームみたいには慣れないなあ。

ゲームの中なら襲ってきた山賊の身包み剥いで頭にプスプス弓矢撃ち込んだり、スタアアアアップ！してきた衛兵を沈静化した後で背後から斬りつけたりしてたんだけどなあ。

まだ魔法だったから良かったけど、もし剣なんかで殺していたら、手に残る肉を断つ感触に眠れない夜を過ごしていたハズだ。

異世界だから法で罰せられる事は無いけど、だからって割り切れるものでもない。

時折込み上がる酸っぱい液に辟易しつつも、どうにか折り合いを付けなくちゃ、とも思う。

ただ塞ぎ込むだけの暇が無い事は幸いかも知れない。……最も、それが僕の精神力を削り取っていくもう1つの理由なんだけど。

「どうしたんだい、ユーリ君？ 疲れているなら少し休むといい、それにユーリ君が望むなら……その、添い寝くらいならしてもいいよ？」

「ユーリ、お腹空いたの？ 私がクッキー食べさせてあげるね♪ それとも……口移しの方がいい？」

教会の居間で椅子に座る僕に、背後からエアリイさんがきゅっと抱き付き、膝の上に乗ったミナがむぎゅむぎゅすり寄っている。

エアリイさんは先日山賊騒動の時に取った僕の行動——偶然にエアリイさんの命を救ったパイタッチ——のせいで、何故か好感度が鰻登りになっている。

曰く、命の恩人だからって事だけど、エアリイさんも僕の命の恩人なんだけどなあ。

それを指摘したら『ふふっ、お揃いだね』なんて顔を朱く染めて言うもんだから、僕のHPは赤ゲージですよ。

どうやらこの世界のエルフ族は、命を救ってくれた人に一生尽くすらしい。

それも一族のしきたりじゃなくて、遺伝子に刻まれた本能に因るものだとか。

以来毎日……といっても2日しか経ってないけど、エアリイさんは僕の側を離れようとしなない。

それを見たミナが対抗心を燃やして、僕に引っ付いて離れない。

流石にトイレに行く時とお風呂に入る時は付いて来ないけど、それ以外はずっと一緒。

加えておはようのキスとおやすみのキスをねだってきた。

余りにかわいかったから二つ返事で了承したのはナイショだ。

そんな訳で、今僕の後ろを付いて回るピク○ンが2人。

まあ2人共かわいいし癒されるからいいか、って思い始めた。

ただ、1つ問題が。

「……………じー」

正面から感情の読み取れない三白眼で僕を見据える少女。

シーナだ。

修道女らしく貞操観念がしっかりしてるせいか、僕がデレデレしてるのがお気に召さないようだ。

もっと健全な男女の関係を築いて欲しいみたいだけど、そもそも2人と男女の関係にすらなっていないし、この2人に抱き付かれて反応しないのは年老いた人だけだと思う。

それでも妹のミナと友人のエアリィさん、2人の恩人——僕自身に自覚はないけど——という事もあってか、余りキツくは言ってこない。

代わりに、じっと何か言いたげに僕を見据えてくるんだ。

シーナもかわいいから別に見られる分にはいいか、って最初は思ってたけどコレはなかなかキツイ。

「あの、シーナ？」

「なんですかユーリさん」

「……なんでもないです」

取り付く島もない。

それも目が乾いて痛くなるんじゃないかってくらい僕を見ながら。若干怖いですヨ。

「シーナ君、そう目くじらを立てなくてもいいんじゃないか？」
「そうだよ、ユーリ悪い事してないよ？」

援護射撃をしてくれる2人。

その気持ちはありがたいんだけど、出来れば抱き付きながらは言わないで欲しい。あぁっ、シーナの僕を見る目が濁ってる！濁ってるよ！

誰でもいいからこの状況なんとかしてくれないかなあ。

そんな風に早くも他力本願な僕の願いが届いたのか、来客を知らせる鐘が響いた。

「あ、はい。すぐ行きます」

いつもの表情に戻して玄関へ向かうシーナ。

うん、やっぱりいつもの方がかわいいよ。

そんな事を考えてると、後ろから耳に熱い吐息を吹きかけられた。

「うひいあ!？」

「酷いなユーリ君、私にはその熱い目を向けてくれないのかい？」

そう言ってご自慢のCカップおっぱいの谷間に僕の頭を埋めるエア
リイさん。

むにむに、ふによふによ。

なにやら幸せな感触が首や後頭部を包み込む。

そして顎を僕の頭に乗せて凭れ掛かる。

いや、もうデレデレですねエアリィさん。

もう喋り方にしかクールキャラ残って無いですよ。

意識を背後に向けていると、胸元にもぞもぞした感触が。

見るとミナが僕のYシャツの中に潜っていた。

流石に先日 of 格好は恥ずかしかったので、今の僕の格好は無地の白Yシャツに濃紺のスラックス。

スラックスはぴったりサイズなのにYシャツはかなり大きめで、仕方なくダボっとさせて着ている。

袖も捲ってみたけど動きにくくて、なんでこのサイズなんだろうかと麻袋片手に悩んだけど、今ならその理由が解る。

「ぶはっ。にへへ、ユーリとみっちゃく♪」

2つ目まで開放したボタンの辺りから頭だけ出したミナと目が合う。僕のシャツの中に潜り込んで密着してるんだ。

確かにぴったりサイズだったらYシャツがパツツンパツツンになって苦しくなったただろう。ゆったりサイズだからミナがこうして入っても丁度良いくらいだ。

しかも今日は日差しが強いからみんな服は薄手。

ミナも薄いベージュのTシャツを着てるから、柔らかいふにふにや擦れると堅くなるさくらんぼの感触が直に伝わってくる。

――落ち着くんだ僕、落ち着くんだ息子。いつ如何なる時も平常心を保つのだ。

出来るだけ意識を逸らしながら必死にうろ覚えの般若心経を唱える。

と、ミナがくいつと体を伸ばして僕の唇を奪う。

一瞬で思考が止まった僕に、とろけるような笑みを見せるミナ。

「……にへへ、ユーリ大好き♪」

がらがらがら。どんがらがっしゃーん。ばりばりばり。きゅーん。そんな音を立てて僕の平常心は脆くも崩れ去った。

いやね、この素敵な天使を相手に平常心を保つだなんて土台無理な話なんですよ！

思わずむぎゅーっと抱き締めようとした所で、部屋の扉が開く。

「ユーリさん、あなたにお客様……」

「……あ」

一気に部屋の温度が氷点下まで下がった気がした。

○がつ×にち、はれ。

きょうは、おそとがはれてるのに、かみなりがおちました。

……ゴメンナサイ、取り乱しました。

いやあ、流星にシーナも我慢の限界だったみたいで遂に雷が迸ったね。

いつものように——これがいつもと表現されるのも問題な気がするけど——床に正座してシーナのお説教を受ける。

今回はミナとエアリィさんも正座だ。

シーナの後ろで所在無さに頬をポリポリ掻いている男の人も、余りの剣幕に口を挟めない様子。

「聞いているんですか、ユーリさんっ」

「は、はいっ！」

「あ、あの、シーナ君？」

「なんですかエアリィさん。お説教はまだ終わってませんよ」

「あうっ、い、いや、その」

「言いたい事があるならハッキリ言う！」

「は、はいっ！後ろの方が困ってますっ！」

「へっ？」

シーナの三白眼に気圧されながらも、背後を指差すエアリィさん。

うん、怯えた子猫みたいで保護欲をそそるけど、人を指差すのは失礼になるから止めようね。

慌てて振り返るシーナから見えないように頭を撫でてあげると、エアリィさんはくすぐったそうに目を細めた。

「ええっと、宜しいでしょうか？」

「あぁっ、申し訳ありません！すっかりお待たせしてしまって」

「いえいえ、とんでもない。……それでは、貴方がユーリ殿でしよ
うか？」

人懐っこそうな笑みを浮かべる男の人。

紫紺の髪の毛に眼鏡、細面で柔和な顔に全身から滲み出る苦労性の

オーラ。

あ、なんかこの人と友達になれそう。

灰色のローブを着てるし、学者か魔術師かもしれない。背格好は僕よりちょっと高め。……ちょっとだからね！

「はい、僕がユーリです。あなたは？」

「申し遅れました。私は魔術師ギルドの者でナカシユといいます。どうぞ宜しく」

そう言って腰を折るナカシユさん。

僕も慌てて頭を下げようとしたらナカシユさんに制される。

「そのまま構いませんよ。……今動いたら悶えますよ、きっと」

右を見ればお説教が終わったと喜んで立ち上がろうとしたミナが、顔を苦悶に歪めて倒れていた。

ああ、その表情もかわいいなあ。

なんかゾクゾクきそう……じゃない、アブナイ性癖に開花しそうだった。

ずっと正座してたから足の感覚無いなあ。

これで立ち上がったら間違いないで倒れて頭ぶつけるね。

目に涙を溜めてうるうると僕を見上げるミナ。

ああっ、ゴメンよミナ。僕にはどうする事も出来ないんだ。いや、よからぬ意味でならどうか出来るけど。そんな目で見上げたら襲っちゃうよ？……だから息子よ、お前の出番はまだ先だ。収まっていなさい。ハウス！ゴーホーム！

「どうも、お見苦しい所をお見せしました」

「いえいえ、こんなに素敵な方々に囲まれて羨ましい。……大変でしよう？頑張って下さい」

最後の方は僕にだけ聞こえる音量で喋るナカシユさん。

良い人だ。気遣いが心に沁みるなあ。

来客用の部屋に移ってまったりとお茶をすすりながらのお話。

教会が広いから部屋は有り余ってるんだ。

シーナとミナとエアリィさんは黙って僕とナカシユさんの会話に耳を傾けている。

ミナとエアリィさんの頭に真新しいたんこぶがあるのが痛々しい。げんこつ1発でお説教は無しにしてももらえたみたいだけど、エアリィさんまでげんこつ落とされるとは思ってたよ。

朝早くにミナが焼いてくれたクッキーをかじりながら、ナカシユさんに尋ねた。

「本題に入る前に幾つか質問したいんですけど、いいですか？」

「ええ、勿論。ただその前に1つお願いしたい事が」

「なんですか？」

ナカシユさんは頭をポリポリ掻きながら苦笑いを浮かべて言った。

「お恥ずかしながら、余り敬語には慣れていませんので良ければお

互い気楽に喋りませんか？」

——よっぽど頭の中が平和な人か、それとも凄腕の諜報員じゃなきゃ、こんなまったりした空気は出せないよなあ。

僕としては平和な人って考えて起きたいけど、初対面でこれだけ空気を緩ませるっていうのも不思議な事なんだよ？

横目で伺ってみるとエアリイさんだけがその事に気付いた様子で僕を見ていた。

まあエアリイさんがいれば大丈夫かな。

「うん、了解。ナカシュって呼べばいい？」

「ああ、それで構わないよ」

「じゃあ早速だけど、ナカシュ」

僕の言葉に身構えて背筋を伸ばすナカシュ。

……聞いたら多分、一気に脱力するだろうなあ。

僕の考えが伝わったのか、3人共ちょっぴり口の端がニヤニヤしてる。

「魔術師ギルドって何？」

「……は？」

その反応がツボに入っただのか、シーナは顔を背けて口元を手で隠し

ぶるぶる震えている。エアリィさんは頑張ってお茶を口に運ぶけどカップがカタカタ震えている。ミナに至っては普通に座ってるように見せてテーブルの下に左手を伸ばして僕の膝をバシバシ叩いてる。いやまあ、僕に取っては当然の疑問なんだけど、みんなにしてみたらギャグにしか思えないんだろうなあ。

そう言えばシーナはギルドについては説明してくれなかったなあ。まあシーナも関わる機会がほとんど無いみたいだし。

気を取り直したナカシュが説明してくれたのはこんな感じ。

魔術師ギルドは、この大陸だけじゃなくて他の大陸にもあるかなり大きなギルド。

細かい所は各大陸で違うけど、魔術を悪用させないよう魔術師をまとめて、みんなで便利な魔術や人の役に立つ魔術を研究しよう、ってギルドらしい。

有事の際、魔術師ギルド所属の魔術師は市民の救出や怪我の治療、瓦礫の撤去作業なんかをするけど戦争に参加したりはしない。

ギルド所属の魔術師には毎月の手当てと国営の宿泊施設やギルド直営の魔導書店なんかで多少割引してもらえる。

と、そこまで聞いてちよっとした疑問が湧いてきた。

「ナカシュ、魔法と魔術と魔導って何が違うの？」

「ああ、簡単な事さ。魔術は魔力を使って火を出したり水を出したりする事、魔法はその水を出す時に用いる理——つまり方法、魔導は魔力をどう扱えば魔術を行使出来るかの指針。それを理解してきっちり分けて話すのはギルドの老人達しか居ないけれど」

「じゃあ魔法使いや魔術師や魔導師も別物？」

「その通り、魔術師は行使出来る魔術の種類が豊富な人、魔導師は扱える魔力が普通よりも多い人、魔法使いはちよっとした魔術が使

える人だね。基本的には魔法使いが成長して魔術師か魔導師になる
って思ってくれればいいよ」

なるへそ、雑多な呼び方じゃなくちゃんと分類されてたんだ。

さて、諸処の疑問が解決された所で、いよいよ本題に入るとしよう
か。

「ねえ、ナカシュ。僕を尋ねてきたって事だけどさ」

「ああ、その事なんだけどね、実は」

「なんで僕がこの村に居るって知ってたの？」

話を進めようとするナカシュを遮って、僕は言葉を続けた。

そう、一番気になってたのはそこなんだ。

僕がこの世界に来てからまだ一週間も経ってない。

なのにナカシュは僕の存在を知っていた。聞けばナカシュは首都『
リレジー』から来たって言うし。

リレジーからここタマタ村までは早馬で1日、普通の馬車でも3日
掛かる。

考えられるのは僕の事を村長さんが「こんな人を保護しましたよ」
って届け出たのを、どんな人か確認しに来たって所だろう。

でもそれなら王国の衛兵や警備隊の人が来るハズだし、わざわざ魔
術師ギルドから人を寄越す理由が解らない。

僕の視線を受け止めて、ナカシュは事も無げに話し始めた。

「こちらの村長から報告を受けてね。怪我をした旅人を1人保護し
た、と。別にそれだけなら警備隊の人達に任せておくんだけど、上

司の気紛れで派遣されてね」

「気紛れ？」

「村長の報告書を読み上げた新入りが、突然現れただなんて転移でもしてきたんスカねえ、なんて言うもんだから上司が興奮しちゃって。事実関係を確かめて事の次第に因ってはギルドに勧誘、いや拉致してきなさい！と言いついてね。それで私が派遣されて来たんだよ」

うわあ、また滅茶苦茶な。

上司の言う事も滅茶苦茶だけど、それに従ってここまで来たナカシユも色んな意味でひどい。

ああ、だから苦労性なオーラが出てたのか。

しかしこれは参ったなあ、と僕は頭を抱えなくなる。

確かに突然現れたのは事実だけど、聞く限り転移魔法はかなりの難易度らしい。もしかしたら伝説級の魔法かもしれない。

そんな中「実は転移しちゃって」なんて言おうもんなら、間違い無くその上司のオモチャにされる。

気は進まないけど、僕は嘘を吐く事にした。

「まあ、ある意味転移はしたみたいなんだけどね」

僕の言葉に顔色を変えるエアリィさん。

大丈夫、と1つ頷いて言葉が続ける。

「元々僕は拾われっ子でさ、爺ちゃん――僕を育ててくれた人が魔術の研究しててね。多分術の失敗で転移というか、吹き飛ばされた

んだと思うよ」

「術の失敗で、という事はかなり大掛かりな術を？」

「らしいよ？」

「随分と曖昧に喋るね」

「僕は魔術について余り知らないし、もっぱら爺ちゃんの身の回りの世話をしたからね。得意なんだよ？鳥を焼いたり野菜を炒めたり」

得意と言いつつ敢えて料理が上手そうに思えない言い方をする。

事実そこまで料理する訳じゃないし。

けど、こういうちょっとした搦め手が後々効いてくるんだ。

「ならどの辺りに住んでいたとか、どうやって戻るのかとか、何か当ては有るのかい？」

「全く。住んでいたのは暗い森の中だったし、爺ちゃんに聞いた事も無かったなあ。おかげで帰り方も解らない状況だよ」

「余程君のお爺さんは変わった方のようなだね。だけど失敗の結果とはいえ1人でそれだけの術を作ろうと言うんだから、実力も折り紙付きなんだろう。どうだい、魔術師ギルドの方で君のお爺さんを探してみようか？君さえ良ければ魔術師ギルドで君を保護してもいい。その方が早く戻れるかもしれないよ？」

きたか、と身構える。

僕の話を全部信じた訳じゃないだろうけど、仮にそんな人がいるなら是非とも接触しておきたいハズ。

それに僕の身柄を魔術師ギルドに置いておけば、将来僕を迎えに来る時に会える。

僕には魔術師ギルドからの保護という形で給金や情報提供が入るから、今考えられるデメリットは皆無に等しい。

さあ、どうやって切り抜けるか。

このやり取りにちよつとワクワクしながら、僕は口を開いた。

「探してもらえるならありがたいけど、魔術師ギルドはなんか怖そうだね」

「おや、なんでそう思うんだい？」

「だって人間を1人拉致してこい、だなんて普通に言えちゃうような人が上司なんでしょ？ そんな人身売買みたいな事を平然と言えちゃうなんて、やだよ」

軽く身震いしてみせると、ナカシュはしまった、って顔を歪めた。上司も冗談で言ったと説明しても不安と不信が残りそうな反応を見せる僕に、なんて言えいいのか解らないようだ。

——僕、ひよつとして役者になれるかも？

妹に付き合つてよくごっこ遊びをした経験がこんな所で役に立つなんて。

妹よ、お兄ちゃん俳優デビューしちゃうかもしれない。

あ、妹の事思い出したらちよつぱり涙が滲んできた。

いけないいけない、心を強く持たないと。

ただナカシュは僕の涙を勘違いしたのか、慌てて取り繕い始めた。

「ああ、無理にとは言わないよ。魔術師ギルドには変人が多いから、私の方から余りユーリには近付かないよう言い含めておくから」

そう言ってチラリと左右を伺う。

何を……ああ、なるほど。

テーブルの左では僕の涙を見たエアリィさんが刺すような視線を向けて、僕の右ではミナがほっぺを膨らませて睨んでいる。

ミナかわいいなあ、そのほっぺにキスしちゃうぞ？

邪念を振り払いつつ、僕は次の一手を指す。

「最初に目が覚めたのがここだし、余り場所を移さない方がいい気がするんだ。ほら、山で遭難した時とかも無理に歩き回らないでその場にいた方が早く発見されるって聞くし」

「それはそうかも知れないけど」

「それにさ」

なおも食い下がるナカシュに奥の手を使う。

といってもやる事はそんなに無いけど。

ミナの体をひよいと持ち上げ、僕の膝の上に座らせる。

勿論後ろからむぎゅーのおまけ付きだ。

ミナはちよっと驚いたみたいだけど、僕の意図を読み取って甘えてくる。

「好きな子の側にいたいなあ、って思うのはいけない事かな？」

その言葉にぽかんとするナカシュ。
毒気を抜かれたのか力無い笑みを浮かべて頭を振った。

「……解った、一応こちらでもそのお爺さんの事は調べてみるけど、必要以上に干渉はしないよ。上司には上手く私から伝えておくよ」

「ありがとう、ナカシュ」

「気にしないでいいよ、慣れてるから」

そう言ってナカシュは席を立った。

玄関まで見送りに行って、トボトボ歩くその背中を見ていると何故か悪い事をしたような気持ちになる。

——多分、上司の人に振り回されてるんだろうなあ。

話を聞く限りやんちゃな幼なじみタイプだね、上司の人って。

ツインテールで縦ロールなんだろうか。

居間に戻ってソファーに腰掛けて脱力する。

ふひー、と大きく息を吐いたら一気に全身がだるくなった。

やっぱり慣れない虚勢は張るもんじゃないね。

来客用の部屋の後片付けを終えたミナがとことこやってきて、だらしなく体を投げ出している僕の上にぼむっと乗っかる。

紫銀の柔らかな髪を優しく撫でると、甘えるように抱き付いてきた。

「さっきはゴメンね、ダシに使っちゃって」

「ううん、私の体も心もユーリのものだから、好きに使っていいん

だよ？」

お待ちなさいお嬢さん、その台詞は非常に危険です。

そんな幸せそうにとろけた顔をしちゃいけません！僕の理性が壊れちゃうでしょ！

と、頭に2つの柔らかい感触が。

上から肩に手を回され抱き締められる。

「ユーリ君、私の事も忘れないでくれよ？私だって君になら全て奪われても構わないんだから」

「むー、エアリィさんはユーリをゆうわくしちゃダメ！」

「おやおやミナ君、独り占めはズルいよ？」

「エアリィさんは私より大人なんだからガマンだよ」

「ならガマンした分ミナ君が寝てから、私はユーリ君と大人な時間を過ごそうかな？」

なにやらバトルが始まったけど、2人にはケンカして欲しくないなあ。

しかも原因が僕って……いやあ、異世界トリップして良かった。

しみじみ思いつつ、僕は体を起こしてミナを左手で抱き寄せ「わあっ」エアリィさんの右手を掴みぐるっと回すようにして「うなっ」

腰元の辺りに座らせる。

驚いた声を上げる2人の頭を撫でながら、ゆっくり諭すように言った。

「2人ともケンカしちゃうだよ？一緒に仲良く笑ってるのが一番い

いし、2人が仲良くしてるのを見てると、僕も嬉しいからね」

「にへへ、はぁい」

「ユーリ君にはかなわないな……ふふっ」

うんうん、お兄さん聞き分けのいい子は大好きですよ。

え？解決方法がヘタレ？

ハハッ、何を今更。

本当は自分の気持ちを整理して、本気で2人の気持ちに向き合わないといけない事くらい、解ってるつもり。

だけど僕にはそんな度胸も甲斐性も無いし、なにより、

——愛しいって気持ちは解るけど、好きってどんな気持ちなのかな……。

恥ずかしながら齢15にして、まだ初恋の1つも経験してない。

正直2人が僕に向けてくれる好意も、イマイチ実感が湧かないっていうか、なんだろう。自分でもよく解んないや。

えっちな気分になる事はよくあるけど、それで突っ走って傷付けちゃうのは絶対に嫌だし。

……冷静に観察したら僕って本当にヘタレでチキンだなあ。

おっと、また思考が沈みがちになってたよ。

ちょっと下がった気分をごまかすように2人の頭を撫でる。

「ユーリさん」

びくうっ！と僕の体が跳ねた。

ギギギと錆び付いたロボットみたいな動きで振り返ると、そこには聖母のような微笑みを浮かべたシーナが。

ああっ、微笑みは素敵なのに、おでこに血管浮き出てるよ！バツテンが、バツテンが浮き出てる！

「そういえばまだユーリさんはお説教の途中でしたね。……ミナ、エアリィさん、ちよつとユーリさんを借りていきます。文句は無いですよね？」

夜叉のような凍える声に顔を青くしてブンブン首を振る2人。

僕は首根っこを掴まれて、廊下を引きずられて行く。

勿論BGMはドナドナだ。

「あ、あの、シーナさん？」

「ふふふ、なんですかユーリさん？階段を上りますから、喋ると舌嚙みますよ」

「ちょ、それは死んじゃう、死んじゃうよ！？だ、誰か、ヘルプミ
ー！」

やたら広い教会の中に僕の悲鳴だけが虚しく響いた。

後で村の子達に聞いたら、この時の叫び声は教会の七不思議に数えられていて、言う事を聞かない子は連れて行かれちゃうって母親に言われたらしい。

以来、子供達は母親の言う事をよく聞くようになったとか。
めでたくないけど、めでたしめでたし。

チャンチャン。……いや、本当に怖かったです。

お勉強の時間、魔法編。

激動の午前が過ぎ、お昼ご飯を食べ終えまったりとしたティータイムへ。

今日のお昼は僕が作った。

といっても簡単な蕎麦だけだね。

四次元麻袋から出て来たのは蕎麦の袋と鳥の胸肉、ネギ、七味、めんつゆ、それと便座カバー……じゃなくて、ぴったりサイズのYシヤツ。

なのであのタイミングで出て来たのかさっぱりだけど、取り敢えず着替えてレツクツキング。

みんな蕎麦を見るのが初めてみたいで興味津々だったけど、温かい蕎麦を気に入ってくれたようであれよあれよという間に5人分茹でた蕎麦がつゆ諸共綺麗さっぱり無くなった。

ミナは初めての蕎麦に舌鼓を打って大満足、エアリイさんは猫舌なのかふーふー冷まして食べていた。

蕎麦を食べるエルフ……なんだろう、すごい光景だ。

一番蕎麦が気に入ったのはシーナで、僕よりも食べていたのにはちよっとびっくりした。

七味もたっぷり振り掛けてたし、案外辛党なのかな？

機嫌も直ったようでなによりだね。

食後のティータイムには蕎麦茶をご馳走。

これも気に入ったみたいで、珍しくシーナのにへらって顔が見れた。うん、普段見れないだけあってすごくかわいい。

ミナは村の子供達と村長さんの所で勉強会、エアリイさんは狩りをしに森へ入って行った。

僕はというと、シーナとマンツーマンで魔法についての特別授業。今の所知ってるのファイヤーとライブだけだしね。

「では授業を始めます」

「シーナ先生、よろしくお願いします」

「解らない所があったらどんどん質問して下さいね」

蕎麦茶片手にご機嫌なシーナ。

いつもより若干ノリノリだ。

「まず、魔法には大きく分けて3つの種類があります。ユーリさん、なんだと思いますか？」

おおう、いきなり当てられた！？

何だろうね、魔法の3つの種類って。

パツと思いつくのは攻撃、回復、補助辺りかな？

元気良く手を挙げてシーナに答える。

「はい、シーナ先生！」

「はい、ユーリさん」

「攻撃、回復、補助の3つだと思います！」

「なるほど……そうきましたか。確かに役割で考えるとそうなりますね」

ありゃ、って事はハズレか。

んー、シーナが考える別の答えで種類が3つあるやつ……。

何だろ、解らないや。

あ、もしかしてこの世界では3つだけ僕にしてみたら3つじゃないとか？

例えば……そう、魔法の属性とか。

「はい、シーナ先生」

「はい、ユーリさん」

「魔法の持つ属性……かな？」

「大正解です、どんどんぱふぱふ」

拍手してくれるシーナ。

前に教えたどんどんぱふぱふがこんなに破壊力あるとは思わなかった。

余りのかわいさに鼻血が出そうになる。

というかここまでテンション高いのは蕎麦茶のおかげか。

恐るべし、蕎麦の力。

「では更に問題です、その3つの属性とは何でしょう？」

そう言って僕の顔を上目遣いに覗き込むシーナ。

ああもう、なんでこの姉妹はこう色々とクリティカルなんだ！

邪念混ざりまくりな煩惱ヘッドで答えを考えてみる。

多分だけど、魔法の名前がFEちっくだから理、光、闇なんじゃないかなあ。

「理、光、闇の3つ？」

「すごい、正解です！ひよつとしてユーリさん知ってました？」

「合ってたんだ。たまたまだよ、僕の世界にある物語に確かそんな表現があったなあって思い出してさ」

「へえ、今度その物語教えて下さいね？こほん、ユーリさんが正解した通りこの世界の魔法は理、光、闇の3つで構成されています。内訳は解りますか？」

「うん、なんとなく。ファイヤーが理魔法、光魔法にはライブも含まれるのかな？」

「その通りです。光魔法には変則的ながら治癒や解毒、精神への干渉も含まれています。理魔法は解りやすいですね、火や水、雷に風なんか該当します。闇魔法はちよつと難しいんですけど……」

言いにくそうに言葉を区切る。

イメージからして禍々しそうだし、聖職者のシーナにはちよつと苦手意識もあるのかな？

この世界でいう闇魔法に、先日僕が使ったノスフェラートも分類されるかな。

だけど闇魔法って分類がそもそも間違ってるよね。その辺りをシーナに提言してみた。

「闇魔法の位置付け、ですか？」

「うん。そうだなあ、例えばさ、シーナは闇ってなんだと思う？こんな感じ、って程度で良いから言ってみて」

「そうですね、暗くて冷たくて……怖いですね」

ちよつと首を傾げて考えるシーナ。

その仕草も姉妹揃ってとってもかわいらしい。

癒やされながら、僕はシーナの答えにちよっぴり肩を落とす。

——やっぱり、そんなイメージかあ。仕方ないって言えばそうなんだろうけど。

魔法を使うにはイメージが大切だ。効果は個人の力量に左右されるだろうけど、発揮される効果の方向性は術者が思い描く必要がある。解りやすく言えば、ファイヤーで出す火の勢いは魔力が関係するけど、ファイヤーで出た火が『どんな風に燃えるか』は自分のイメージに左右される。

使う魔法をどう捉えるかで、魔法の効果は変わってくる。

まあ何が言いたいのかハッキリ言うと、あの時僕が使ったノスフェラート、あれを僕は闇魔法として使ってない。

つまり、僕はこの世界の法則を無視した魔法を使った事になる。

どうやって、何を、どのように、使ったのか。

多分、僕とシーナの捉え方の違い——闇に対するイメージだけに止まらない相違——に、ヒントがあるんじゃないかって思う。

そんな漠然としたモヤモヤを抱えて、僕は口を開いた。

「僕の闇に対するイメージ……考え方は、シーナとだいぶ違うね」

「ユーリさんはどんな風に考えてるんですか？」

「僕思う闇は……暖かいよ」

「暖かい？」

ぽかんと呆けたような顔をするシーナ。

そりゃそうだろう、自分が思っていたイメージとほぼ180度違う

答えが返ってきたんだから。

「シーナは闇を考えた時、光の対極にあるものって想像したんじゃない？」

「ええ、だって光と闇は相反するものなんじゃ」

「そこから変えてみよっか」

「ふえ？」

「まず光の対極にあるのは闇じゃない。光の反対側にあるのは、影なんだ」

「影……ですか？」

「そうそう、光があるから影が出来るし、影があるって事はどこから光が差してるって事だよな？」

「なるほど、言われてみればそうですね。でも光と相反するものが影なら、闇って何なんですか？」

よしっ、食い付いた。

知識や発想を教えるのに一番の近道は、疑問と興味を持ってもらう事。

それが出来たら、後は互いの気が済むまで持論や疑問をぶつけ合えば良い。

「それなんだけど、僕は『闇』っていうのは万物の祖……全ての母親なんじゃないかな、って考えてるんだ」

「母親？」

「そう、例えば人間はどうやって生まれてきたのか、考えた事はある？」

「え、それは神様が人間をお作りになったんじゃないんですか？」

「修道女のシーナらしい答えだね。それも答えの1つだと思うよ」

「答えの1つ、ってユーリさんの考えは違うんですか？」

「僕の世界では神様を持たない人達も多くてね」

僕の言葉に驚いた顔をするシーナ。

一神教が世界に広く布教されているこの世界じゃ確かに信じられない事だろうなあ。

「そうだなあ、花を咲かせようと考えた時に、種を植えるよね。僕の世界の研究者は、全ての生物は種で殖えるって考えたんだ」

「種、ですか。私達人間も種で？」

「うん、肉眼では見えないけどね。詳しく説明すると混乱しちゃうから、概念的に種のようなものって思ってくればいいよ。その小さな種で人間が殖えるとして、生まれてくる種は誰が作ったんだろうね？」

「それは神様じゃないんですか？」

「うーん、難しいかもしれないけど一旦神様の事は忘れよう。神様以外で、何だと思う？」

「神様以外ですか……やっぱり親でしょうか」

「よくできました、その考え方が出発点だよ。じゃあその親は誰が生んだんだろう」

「そのまた親ですね」

「そうだね。じゃあそのまた親、更にその親……辿っていったら、一番最初の親は誰になるんだろう？」

そこまで喋って、僕はカラカラの喉にすっかり冷たくなった蕎麦茶を流し込んだ。

神様というジョーカーを使えなくて、シーナはうんうん悩んでいる。僕自身も、この先を上手く説明出来るか解らない。

妹は感覚で理解してくれたけど、論理で納得しようとした両親は最期まで理解出来なかった。何せ説明する側の僕も曖昧な感覚で、こうなんじゃないかって勝手に解釈してるだけだし。

なかなか難しいな、って思ってたらしーナが不意にぱっと顔を上げた。

「ユーリさん、ひょっとして……その最初の親が生まれる前は、何も無かったんじゃないですか」

「おおう、よくそこまで辿り着けたね!？」

正直、神様を信じてる人に、僕の世界の知識無しにその発想が出来るとは思って無かった。

中学で習うレベルの地学を知らない人に説明するのは難しいしね。

「僕達の世界では、最初には何も無かったっていうのが常識というか定説なんだ。ある時、何らかの理由で何も無かった所から、生命が、世界が誕生した。その何らかの理由の1つが」

「ユーリさんの世界の神様、ですか？」

僕の言葉を継いでしてやったり顔のシーナ。

先に言われちゃったなあって悔しい反面、僕はシーナの柔軟な発想力や頭の回転の早さに驚いていた。

実はシーナって天才なのかも。

もしかしたら僕の考えを解ってもらえるかな？なんて考えてちよっ

とワクワクドキドキしながら、僕はわざとらしく咳をした。
ここまでは色んな学者や本から得た知識を披露してただけ。
ここからは僕自身の、僕だけの言葉で説明しなきゃ。

「ここからは僕の想像っていうか妄想なんだけど、何も無かった所に『得体の知れない何か』が世界を作ったんじゃない、そもそも何も無かったっていうのが間違いないかなって、僕は考えるんだ」

「えっと、どういう事ですか？」

「物質的な意味では、本当に何も無かったんだと思う。光や熱、その他思い付くもの全て。ただ、精神的な意味では、何かが存在していたんだと思う」

「精神的な何か……幽霊みたいなものですか？」

「うん。何も無かった場所に神様みたいな存在が世界を作り出したんじゃない、『何も無い』っていう存在が自らの意志で世界を生み出したんだ、って僕は思うんだ」

そこまで聞いて、シーナはあっと声を漏らした。

どうやら僕が言いたい事に気が付いたみたい。

本当に賢いなあ、と嫉妬する所か感心しちゃったよ。

「つまりユーリさんは、その何も無い存在を『闇』って考えているんですね」

「大正解。正解した優秀なシーナには後で豪華商品をプレゼントしちゃおう」

「わ、ありがとうございます」

正解した事に喜ぶシーナ。
でも突然怪訝そうな顔をして僕に言った。

「ユーリさんの闇に対する捉え方は解りましたけど、なんで突然そんな事を？」

いやあ、流石シーナ。そこまで解っちゃうかあ。

……いや、多分誰でも気付いたよね。

本当はエアリィさんもいる時に言った方が良いんだろうけど、先に一般人代表のシーナの反応を見ておきたい。

今のエアリィさんだったらミナみたいになんでも受け入れてくれそうだし。

いや、受け入れてくれるのは大変ありがたいんだけど、シーナみたいに僕に対してフラットな感情を持つてる人の意見を聞いて置かないと後々危ない事が起きそうな気がする。

また波紋を呼ぶ事になるんだろうなあ、ってどこか他人事のように感じながら僕は爆弾を投下する覚悟を決めた。

「こないだの山賊騒動の時にさ、僕ファイヤー以外の魔法使ったんだ」

「そうなんですか！？2人共話してくれないから、何かあったのかなとは思ってましたけど、よく即興で出来ましたね？」

「まだ驚くのは早いと思うよ……」

「え、何ですか？」

「いやいや、なんでも。それで山賊相手に多分この世界の闇魔法を使ったんだけど」

「や、闇魔法を使ったんですか！？難易度も高く扱うのに初歩のもので数年かかるのに！」

「シーナ、落ち着いて。ここからが一番大切な事だから」

逸るシーナをどうにかなだめて、この日一番の爆弾をポイッチョした。

「……実はそれを使う時、僕は闇魔法として考えてないのにそれが使えたんだ」

「……はい？」

「この世界ではファイヤーを使うにしても、『理魔法のファイヤー』って理解してないと使えないでしょ？」

「ええ、そうですね。……え？」

「って事はさ、僕がいくら頑張っても闇魔法のライブや光魔法のファイヤーは使えないハズだよな？」

「その通りですね。え、え？」

「ゴメン、この世界に存在しない魔法使っちゃった♪てへぺろ」

舌をちよつと出しておでこに手をぺちんと当てる。

こらそこ、面と向かってかわいくないとかわわない！

……や、かわいいって言われてもそれはそれでシヨックだけどさ。

シーナは頭に？を4つくらい浮かべてたけど、徐々に顔から表情が消えていく。

そしてゆっくりと目が大きく開かれて、もうこれ以上はって所で突然立ち上がって悲鳴のような声を上げた。

「え、あ、それ、えっ、な、あああああああああつ!？」

うん、とっても素敵にパニックってるね。

こういう時は下手に刺激しないで本人が落ち着くまで放っておくに限る。

……決してヘタレてる訳じゃない、うん。だってカップやお皿割れちゃったら危ないし。

まったり蕎麦茶をすすって、シーナが落ち着くまでしばらくティータイムを満喫した。

「うう、恥ずかしい所をお見せしました」

「いやいや、見た事無いシーナの一面を見て楽しかったよ」

はうっ、と小さくなるシーナ。

顔を真っ赤にしつつも、持ってる蕎麦茶は手放さない所がちょっぴりおかしい。

ただまあ、シーナとも話し合ったけど新しい魔法を使えるようになったのは極力ナイシヨにしておく事にした。

エアリィさんは僕が魔法使った時に一緒にいたから話すつもりだけど、ミナには黙っていようと思う。

もしかしたら、それを知ってるせいでミナが危険に晒されるかもしれないね。

「それにしても、シーナがあんなにびっくりするとは思わなかった」

「驚いて当然じゃないですか！あんな事突然言われたら誰だってびっくりしますよ！」

「あはは、そうかもね。でもあわあわしてるシーナもかわいかったよ」

「……わ、忘れて下さいっ、思い出しちゃダメですう！」

空になったカップを置いてぶんぶん腕を振り回すシーナ。

ゴメンゴメン、と頭を撫でたら真っ赤になって動きが止まる。

「そっ、そんな事してもごまかされませんかね！？」

「困ったなあ、どうしたら許してくれる？」

「……もうちょっと、撫でてくれたら、その……いい、です」

ダメだ、なんかもうかわいすぎる。

慣れない真面目モードで話したせいか、反動でものすごい甘えたくなってきた。

耐えきれなくなった僕はシーナをお姫様抱っこしてソファに座った。

「え、あ、あのっ、ユーリさん！？」

「ああ、気にしないで。かわいいシーナに触れたくなっただけだから」

「かつ、かわ……！？やっ、ダメです、恥ずかしいっ」

わたわたと暴れるシーナを膝の上に座らせて、優しく後ろから抱き

締めた。

あ、髪の毛から良い匂いがするなあ。

くんかくんかすーはーすーはー。

……うん、堪能した。

シーナったら耳たぶまで真っ赤にして、恥ずかしがり屋さんなのか？

ちよっぴりイタズラしてみたくなった僕は、その真っ赤な耳たぶを甘噛みしてみた。

「ひゃうっ！？あっ、やあっ、あっあっ、んううっ」

やわっこい耳たぶをはみはみする度に、シーナの体がぴくぴく跳ねる。

面白くなって、僕は耳たぶを甘噛みしつつ、頭を優しく撫でてあげる。

「んやあっ、ユーリ、さんっ、あっ、それダメっ、ダメですう、ふやあ、あっ、ああっ、やあ、私っ、ばかになっちゃいますうつ、ふああっ」

小刻みに震えていた体が一際大きく震え、くてっと力無く僕へ凭れ掛かる。

潤んだ目は虚ろで、時折小さく体が跳ねる。

——あれ、これってかなりえっちくない？

意識した途端、下腹部に血液がすごい勢いで流れ込んだ。
ま、まずい、落ち着け息子、スタアアアアップ!?

しかし願い虚しく、おあずけばっかりだった息子は僕の言う事なんか聞かずにすたんだっぷ。

ふりふりと揺れるシーナのお尻の間で少年の自己主張を始めた。

「ふわあ……ユーリちゃん、なんだかカタイの当たってましゅ……。
なんでしゅか、これえ……。？」

絶頂の余韻なのか、呂律が回らないシーナがお尻を振って何が当たっているのか確かめようとする。こっ、これはまずいっ！
柔らかなお尻の感触がとっても気持ち良い。

「ちよっ、待ってシーナっ!？」

「カタイのこしゅれて、きもちいいれしゅう♪」

なんて淫乱な。お兄ちゃんそんなえっちな娘は大好物ですよ！
違う、間違えた。

今のはナシでっ！

というかパニックってないで早くシーナをなんとかしないと、息子のHP的な意味でまずい。

ここはもう一度シーナを気持ち良くしてあげるしかない。

早速僕は耳たぶを口に含み、はむはむもにゅもにゅ甘噛みを始めた。
同時に頭を撫で回すのも忘れない。

「んやあ、ユーリちゃん、んあつ、しよれ、らめれしゅう、ふああ
っ♪」

腰をグラインドさせて妖しく身をくねらせるシーナ。

まるでゲームに出て来るサキュバスみたいに、綺麗でえっちな雰囲気
を纏ってる。

実は3人の中で一番えっちなんじゃないだろうか。

一番えっちな娘が修道女……シチュエーションだけでもご飯3杯い
けそうなアレだね！

なんて考えたりして、どうにか意識をラグビー部並みのタックルを
シーナのお尻にかまそうとする息子から逸らす。

「ふあつ、やらあ、わらひ、らめになっひやいましゅう、あつ、あ
あっ♪」

扇情的な声を上げるシーナ。

多分もうそろそろ限界なハズ。

ダメ押しに耳たぶをちゅううつ、って吸い上げる。

その瞬間、シーナは体を大きく跳ねさせて、ぐったりと脱力した。

余りの強い刺激に体が耐えられなくなって失神したみたい。

敏感で淫乱でかわいいなんて最高じゃないか。

シーナをソファアに寝かせて、風邪を引かないようにお腹に薄いタ
オルケットを掛けてあげる。

これでよし。

「……トイレ行ってこよつと」

さあ、僕の強靱な精神力に惜しめない賞賛を浴びせて！

あ、やっぱりいいや。

先にトイレ行ってくるから。

ふう、ただいま。

あの後起きたシーナにジャンピング土下座をして、なんとか許してもらった。

「ユーリさんはえっちです、けだものです」って涙目で言われてちよつとゾクゾクした……いえ、なんでもありません。

帰ってきたミナは何があったのなんとなく理解したみたいで、僕の耳に口を寄せて「私ならいつでもイイよ……？」って言ってきたのはびっくりしたよ。

えろえろ姉妹め、食べちゃうよ？

まあ後でご機嫌取りに蕎麦殻の枕とペットボトルに入った蕎麦茶を贈っておこう。

——まあ、なんだかんだでシーナとちよつぱり仲良くなれたかな？

閑話——忘れられた集落から。

あたたかい。

最初に感じたのは私を包み込むような温かさ。

優しくそっと回される腕に甘えて、耳を胸に当てると愛しい人の鼓動が、私の鼓膜を、脳を、そして心を揺らす。

彼に名前を呼ばれる度に、私の胸いっぱいには歓喜が広がり心が震える。

ほら、今も私を呼ぶ声がする。

「美由里」

声を聴くだけで、私の心がダメになりそうになる。

ずっと聴いていたい。ずっと触れ合っていたい。ずっとずっと、彼の側にいたい。

彼の手が私の頭を撫でる度、彼の指が私の髪を梳く度、体が、心が融けそうになる。

きつと、この世に生を受けた瞬間から、私の魂は彼を欲していた。

彼になら全てを捧げても構わない。

私の体は彼に貪ってもらう為、私の心は彼に弄んでもらう為にある。

——だから早く、私の全てを奪いに来て。

そこで目が覚めた。

目に映るのはいつもと変わらない景色。

木と煉瓦で組まれた内壁に真つ赤な絨毯。

魔法の火が灯されたカンテラに照らされて薄く影が伸び、室内を明るく照らして出す。

私の目覚めと共に輝きだした魔法の火が、やや肌寒い室温を一気に常温にまで引き上げた。

枕元に置いた時計が朝の10時を示している。

魔力で動く自動式卓上カレンダーは最後の記憶から約半年先の日を映し出していた。

今回の休眠は短かったなあ、と大きく伸びをする。

ぼきぼきべきべき。

関節が酷い音を立てる。

「んうゝ、快調快調。にしても随分と懐かしい夢を見たなあ。元気にしてるかな、お兄ちゃん？」

幸せな夢を思い返すと、にへらあってだらしく顔が歪む。

今日は朝から良い気分だ。

思わず鼻歌を歌いながらテーブルの上に置いてある水晶に目を向けると――、

「うそっ！？割れてんじゃん！え、えっ、いつ割れたの！？ってこうしてる場合じゃない、行かないと！」

慌てて布団を跳ね退け着替えを箆笥から取り出しパジャマを脱ぎ捨てる。

ちやつちやつと着替えて割れた水晶を片付け、急いで部屋を飛び出し

た。

あの水晶は『招きの水晶』って呼ばれるマジックアイテム。所謂魔具の一種なんだけど、ちょっと特殊な性能を持つてて普通の人には扱いにくい。

魔具は使用者が魔力を込める事で効力を発揮するけど、招きの水晶は使用者の想いを消費して発動するタイプの魔具だ。

逢いたいって想いを毎日込めて水晶を想いでいっぱいしたら、水晶が割れて想い人を呼び出す事が出来る。

普通だったら会いに行った方が早いし、相手の都合に関係無く呼び出すもんだからイマイチ使い勝手は宜しくない。

でも私にはこれ以上無い至高のアイテムだ。

なにせ本来なら二度と逢えないハズのお兄ちゃんに逢えるというチートアイテムだからね。

長い回廊を右に回ると1人の女性がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

背が高くスラッとしてモデルさんかってくらい足が長い。

それでいて体の要所は女性的な丸みを帯びていて悩ましげだし、胸は大きいし——ありゃFは間違いないわね。

切れ長で睫毛の長い赤い瞳と、腰まで伸びる長い緑銀のサラサラな髪の毛が相俟ってエキゾチックパンク……いや、少なくとも日本じゃないか。

まあ要約するとスゴイ美人な近所のお姉さん、って雰囲気だ。

私とお揃いの赤いローブを着てるけど、本当にお揃いなのか？ってくらい輝いて見える。

やっぱり素材が良いと服も違って見えるのね。

彼女も私に気付いたようで、甘い微笑みを浮かべて小さく手を振る。

「あら、ミューリちゃんおはよう。休眠してる間お話出来なくて寂しかったわあ。……って、あ、あら？待ってミューリちゃん、私そんなに早く走れないわよお」

上げた手をむんずと掴まえてそのまま駆け抜ける。

普段なら抱き付いて甘えたい所だけど、今は一大事。

お姉ちゃんに付き合ってぼわぼわしてたら日がくれちゃうよ。

迷路のように入り組んだ回廊を走りがてら、掻い摘んでこれからの事を話しておく。

「お姉ちゃん、起きたら水晶が割れてたの！」

「まあ、じゃあ遂にミューリちゃんのお兄さんがこの世界に？」

「そうなの、今から迎えに行くから長老に許可もらいに行くよ！返事は聞かないけどさ」

「でもそれって許可もらった事になるのかしら？」

「いいのよ、本人知らない間に抜け出して事後承諾にするより良心的でしょ？」

「わあ、ミューリちゃん優しいのね♪良い子に育ってお姉ちゃん嬉しいわ」

お解り頂けただろうか。なんちって。

この短い会話で充分解る通り、お姉ちゃんはちよつとのんびり屋で天然で良い人。

これで私達の中で一番頭が良い天才って言うんだからびっくりだよね。

何度目かの角を曲がると、やけに荘厳な雰囲気醸し出している扉が見えた。

お姉ちゃんの手を離し更に加速して、勢いを殺さずに両足で踏み切りドロップキック。

「たのもー！ー！」

「ぶべらぐあっ！」

思いつ切り開かれた扉にぶつかり何かが吹き飛んだ気がするけど気にしない。

ゴロゴロ転がって体勢を整える。

すくつと立ち上がって椅子に座って気ままにお茶を飲んでいた禿げ上がったお爺さんに言い放つ。

「という訳で、ちよつくら行ってくるわ！」

「ミューリちゃん、それじゃ誰も解らないわよお？ほら、長老固まつちやてる」

「そう？でもお姉ちゃんは解ってるからいいんじゃない？誰にも解らないのにお姉ちゃんだけ解るなんて、流石お姉ちゃん頭良い！」

「うふふ、ミューリちゃんに褒められちゃったあ」

わあい、と2人で仲良くハイタッチ。

……はっ！？いけないいけない、お姉ちゃんワールドに引き込まれちゃった。

お姉ちゃんと会話するところまでばわわしてくる。

と、さっき吹き飛ばされた衛兵のおっさん……ああ、いけない。綺麗

麗な言葉を使わないとお兄ちゃんに「めっ」ってされちゃう。衛兵の綺麗なおっさんが近付いてきた。

「待てミューリ、一体何処へ行くと言うんだ」

「決まってるじゃない、前世から結ばれていた愛しの伴侶の元よ！」
「何、遂に見付かったのか!？」

「そうなの、早く逢いに行かないとお兄ちゃん素敵で格好良くて優しくてフェロモンむんむんで一目見ただけで胸がキュンとなって思い描いただけで切なくなって触れられただけでイっちゃいそうになつて、ああ、ああ！」

「悶えるなよ！」

「これが悶えずにいられますか！待っててねお兄ちゃん、すぐイクから！」

お姉ちゃんの手を掴み直して開け放たれたままの扉を駆け抜ける。すべすべしてもちもちして思わず頬を擦り寄せたくなる感触だけど、なんとかお姉ちゃんの手から意識を切り離す。

回廊を左へ左へ、時々右へ。

階段を駆け降り再びダッシュ。

引き摺られるようになりながら横を走るお姉ちゃんが思い出したように言った。

「ねえミューリちゃん、今向かってるのって転移門？」

「そうだよ！あれならお兄ちゃんの元へひとつ飛びだもん」

「でも私魔石持っていないわよお？」

「大丈夫、こんな事も有ろうかとコッソリ研究塔からちよろまかしてきたから！」

「あらあ、悪い子♪でも恋する乙女は止められないって言うし、今回は特別に許しちゃうわ」

「さっすが、お姉ちゃんの話が解るっ！」

階段を駆け降り人通りの多い通路を擦り抜けるように駆け抜ける。
みんな何事かとびっくりしてるけど、私とお姉ちゃんの顔を見て把握したらしく声援が飛んでくる。

「おっ、嬢ちゃん遂に恋人見付かったのか！」

「そうだよ！今から抱き締めてもらいに行くの！」

「よし、行ってこい！子供出来るまで帰って来るなよ！」

「ありがと、おじさん！」

「そうかい、やっとミューリちゃんにも春が来たんだねえ」

「ミューリお姉ちゃん、結婚するの？おめでと〜♪」

「ナギさんも遂に嫁に行くのかあ。ミューリ嬢ちゃんとも仲良くな
！」

「くうっ、ミューリちゃんとナギさんが嫁に行っちゃうなんて」

「ははは、めでたい事さ、泣くんじゃないよ！それにしてもあの2人を一度に嫁に迎えるなんて、婿殿は幸せ者だねえ」

「あらあら、皆さんありがとうございます」

「みんな、ありがと、ありがとうございます！」

暖かい声援に包まれて、ちょっとくすぐったい。

みんなが祝福してくれた分より、もっと幸せになるからね！

一足早い結婚式みたいになった回廊も通り過ぎ、いよいよ目的の扉が見えてくる。

同じようにお姉ちゃんの手を離して空中に飛び上がる。

「ファルコンキイイック！」

「ヌウウウイ！」

ワートホグに吹き飛ばされたマスターチーフみたいな声がしたけど気にしない。

今度はそのまましゅたつと着地を決める。

「10, 0! なんちって」

「きやあゝ、ミュージリちゃんカッコ良い〜♪」

わあい、と笑顔で2度目のハイタッチ。

吹き飛ばされてピクピクしてる転移門の管理人に、すちゃっと右手を上げてサムズアップ。

「そんな訳で、ちょっくら行ってくるわ！」

左手に握り締めた魔石を割ると、周囲に魔力の渦が出来る。

開放された魔力に反応して転移門が蒼く輝き、私とお姉ちゃんの体を光が包み込む。

右手でお姉ちゃんの手を繋ぎ、私は高らかに詠唱を始めた。

「開け、空間の門よ! 私とお姉ちゃんを望むがまま、愛しののお兄

ちゃんの元へ運べ！レッツ転移！」

眩い光が視界を埋め尽くし、空間が弾けるように歪んで、私とお姉ちゃんは空間を飛んだ。

「しかし、ミューリにあそこまで慕われるとは如何程の人物だったのか。それとなく同情もするが」

ふう、と溜め息を吐き出して走り去った廊下を見詰める。

と、先程まで動かなかった長老が微かに身動ぎした。

矢張り長老ともなれば何が起こるのか予見出来ていたのだろう、動じず黙って送り出してやるとは流石長老。

俺もいつかは長老のようにどっしりと構えた大人になりたいものだ。

「ふわぁーあ、ちょっとうたた寝してしもうたわい」

「って、寝てたんかい！」

「ほ、どうしたんじゃロージ？何かあったんかいのう」

背伸びして骨を鳴らす長老。

アンタが寝てる間に嵐が来たのさ、とは言えずに深い溜め息を吐くしか無かった。

閑話——忘れられた集落から。（後書き）

今回はちよっぴり短いです。

それと前回のお話にはなんちゃって科学が満載です。

学校とかで話したら黄色い救急車を呼ばれるので注意が必要です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5486x/>

起きたら異世界でした。

2011年11月10日12時52分発行